

秋田県文化財調査報告書第219集

曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I

——上聖遺跡——

1992・2

秋田県教育委員会

曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I

— 上聖遺跡 —

1992・2

秋田県教育委員会

序

本県には、先人の遺産である埋蔵文化財が数多く残されています。この埋蔵文化財を保護し、後世に伝えてゆくことは、私たちの努めであります。

このたび、曲田地区農免農道整備事業の道路路線が、上聖遺跡の一部を通過することになりました。このため本教育委員会は、工事に先立って道路工事対象区にかかった遺跡範囲の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代の袋状土坑や焼土遺構などとともに土器、石器が出土し、当時の生活の一端を明らかにすることができました。

本報告書は、これらの調査成果をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護のために広く活用され、同時に郷土の歴史資料として役立てば幸いです。

最後になりましたが、本調査の実施並びに本報告書の刊行に当たり御援助、ご協力をいただきました秋田県農政部、北秋田農林事務所、大館市教育委員会、比内町教育委員会をはじめ関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成4年2月29日

秋田県教育委員会

教育長 橋本顕信

例　　言

1. 本報告書は、曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の1冊目の報告書である。
2. 本報告書は平成3年度に調査した大館市所在の上聖遺跡の調査結果を収めたものである。
3. 本書の執筆は谷地 薫が行った。
4. 土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に従った。
5. 方位はMA50グリッド杭における磁北である。真北は4度22分42秒東側にかたよっている。
6. 発掘調査および遺物整理にあたって、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略、五十音順)

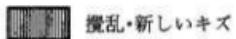
秋元信夫　板橋範芳　林　謙作　藤井安正

凡　　例

1. 各遺構に付している略記号は以下のとおりである。
SK (土坑) SN (焼土遺構) SQ (配石遺構)
2. 遺構の番号は検出順に通し番号とした。精査段階で欠番となったものもある。
3. 掘図中の遺物実測図と拓本はすべて通し番号とした。
4. 石器観察表中の単位は、長さ、幅、厚さがcm、重さがgである。
5. 文章中および表中の法量の推定値は()で表示した。
6. 掘図中のスクリーン・トーン、シンボルマークは以下のように使い分けた。これ以外のマークは各図中に凡例を示した。



焼土



搅乱・新しいキズ



磨り面



土器



石器



疋

目 次

序

例言・凡例

目次・表目次・挿図目次・図版目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至るまで	1
第2節 調査の組織と構成	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 遺跡周辺の地形・地質	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 発掘調査の概要	7
第1節 遺跡の概観	7
第2節 調査の方法	7
第3節 調査の経過	10
第4章 調査の記録	13
第1節 基本層序	13
第2節 検出遺構と遺物	14
1 土坑	14
2 配石遺構	23
3 焼土遺構	23
第3節 遺構外出土遺物	25
第5章 まとめ	32

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	4
第2表 土坑一覧表	15・16
第3表 地点別出土遺物一覧表	31
第4表 米代川流域の「打面調整剥離技法」による石匙の出土地名表	35

挿図目次

第1図	上聖遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	5
第2図	遺跡周辺地形図	8
第3図	調査範囲図	9
第4図	遺構配置図	11・12
第5図	基本層位図	13
第6図	S K01・02・03土坑、S K02土坑出土石器	17
第7図	S K05・06・07土坑、S K05・06土坑出土石器	18
第8図	S K08・09・10土坑、S K08土坑出土石器	19
第9図	S K11・12・13・21土坑	20
第10図	S K16土坑と出土土器	21
第11図	S K18・22・23土坑、S Q20配石遺構と出土石器	22
第12図	S N17焼土遺構と出土石器	24
第13図	遺構外出出土土器（1）	26
第14図	遺構外出出土土器（2）	27
第15図	遺構外出出土石器（1）	29
第16図	遺構外出出土石器（2）	30

図版目次

図版 1	1 道跡遠景 道日本木スキ一場から (南→北) 2 道跡遠景 10国道103号から (南西→北東)	図版 8	3 S K08土坑出土石器 4 S K09土坑完掘状況 (西→東)	
図版 2	1 道跡近景 家ノ後道跡から (東→西) 2 調査区北側 (南東→北西)	図版 9	1 S K10土坑完掘状況 (北西→南東) 2 S K10土坑断面土層 (北東→南西) 3 S K11土坑完掘状況 (南西→北東)	
図版 3	1 調査区東側 (北西→南東) 2 調査区北側 調査前の状況 (南東→北西) 3 調査区東側 調査前の状況 (北西→南東)	図版10	4 S K12土坑断面土層 (南西→北東) 1 S K13土坑完掘状況 (南→北) 2 S K16土坑断面土層 (南西→北東) 3 S K16土坑出土石器	
図版 4	1 S K01土坑完掘状況 (北→南) 2 S K01土坑断面土層 (南→北) 3 S K03土坑完掘状況 (東→西)	図版11	1 S K18土坑完掘状況 (南西→北東) 2 S K21土坑断面土層 (西→東) 3 S K22土坑完掘状況 (西→東) 4 S K23土坑断面土層 (北東→南西) 5 S Q20配石造構検出状況 (西→東)	
図版 5	1 S K02土坑完掘状況 (北→南) 2 S K02土坑断面土層 (南→北) 3 S K02土坑出土石器	図版12	6 S Q20配石造構出土石器 1 S N17焼土造構検出状況 (西→東) 2 S N17焼土造構断面土層 (南→北) 3 S N17焼土造構石器出土状況 (北→南) 4 範囲確認調査時の検出状況 (南→北) 5 S N17焼土造構出土石器	
図版 6	1 S K05土坑完掘状況 (北東→南西) 2 S K05土坑断面土層 (南→北) 3 S K05土坑出土石器	図版13	図版14	道構外出土土器 道構外出土石器
図版 7	1 S K06土坑完掘状況 (北→南) 2 S K06土坑断面土層 (北→南) 3 S K06土坑出土石器 4 S K07土坑完掘状況 (北→南)			
図版 8	1 S K08土坑断面土層 (南西→北東) 2 S K08土坑完掘状況 (北東→南西)			

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

曲田地区農免農道は、大館市曲田・中山両地区の農業合理化を目的とした曲田字沢口から中山字鬼沢に至る全長3.3kmの道路である。

本農道の計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、県農政部北秋田農林事務所は、文化財保護法に基づき秋田県教育委員会に遺跡調査の依頼を行った。秋田県教育委員会はこれを受けて、平成元年度に計画路線内の遺跡分布調査を行い、路線内に係る周知の遺跡を1箇所確認した。さらに平成2年度に試掘調査可能な地点について分布調査を行い、新たに家ノ後遺跡と上聖遺跡の2遺跡を発見した。

この遺跡分布調査の結果を受けて、平成2年度には家ノ後遺跡と上聖遺跡の範囲確認調査を実施し、両遺跡の範囲内を計画路線が通ることが明らかになった。これらの遺跡の保存について、秋田県教育委員会は原因者と協議の結果、記録保存の措置をとることで合意し、平成3年5月13日～6月8日に上聖遺跡、同6月10日～11月15日に家ノ後遺跡の発掘調査を実施した。

第2節 調査の組織と構成

所 在 地	秋田県大館市曲田字上聖3-2外
調 査 期 間	平成3年5月13日～平成3年6月8日
調 査 面 積	760m ²
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	谷地 煉（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事） 柴田 陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター文化財主任）
繪 務 担 当	佐田 茂（秋田県埋蔵文化財センター主査） 佐々木 真（秋田県埋蔵文化財センター主任）
調査協力機関	秋田県北秋田農林事務所 大館市教育委員会 比内町教育委員会

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡周辺の地形・地質

上聖遺跡が存在する大館市は秋田県の北東部に位置し、東は鹿角郡小坂町と鹿角市、南は北秋田郡比内町、南西は北秋田郡鷹巣町、西は北秋田郡田代町に接し、北西及び北緯は青森県との県境となっている。市域は大きくは標高200~800m前後の山地と標高40~100mの盆地とから成る。前者はいわゆる出羽山地の一部で、北西側に白神山地、東側に高森山地、南西側に摩当山地が存在する。後者は断層による陥没盆地で、内部には米代川・長木川・下内川・岸川等の河川が存在し、これらの河川の營力によって大館段丘地や低地が形成されている。

上聖遺跡は大館市南部の河岸段丘上にある。大館盆地周縁には米代川とその支流によって形成された段丘が発達し、高位から第1段丘~第5段丘に区分されているが、遺跡は中位の第3段丘上に立地する。この段丘面は閑上段丘とも呼ばれ、構成層は鳥越軽石質火山灰層の河成二次堆積物である。遺跡周辺の段丘や低地の基盤層は第4紀の未固結堆積物であるが、遺跡北方及び南方の山地は主に新第3紀の大滝層と大葛層及び火山性貫入岩類からなる。剝片石器の原料となる頁岩が含まれるのは大滝層である。大滝層は油田地域の女川層に酷似し、硬質泥岩と浮石凝灰岩との互層をなして遺跡北方の高森山地に広く分布している。

遺跡の東側では北方の鞍掛山(標高484.4m)東麓から高森山地を下刻して南流する数本の侵食谷が、段丘を開析して南側の十二所先行谷低地へ流れ込んでいる。遺跡の占地する段丘面は、この侵食谷によって東側を区切られ、さらにその小枝谷によって北西から南東に斜めに開析されて、南東に向かって張り出す舌状台地となっている。この舌状台地の西側には平坦な段丘面が広がっている。舌状台地は南北約60m、東西約100mで、中央部の標高は91~92m、台地上と南側の段丘崖下の沖積地との比高差は約15mである。

遺跡の東側の侵食谷は、沖積地への出口でせき止められて溜池となっており、通称「ダイガクツツミ」と呼ばれている。この溜池をつくる際の土取り跡が調査区東端部と調査区外の遺跡北東部に残っている。台地上の中央には幅約15m、深さ約2mの埋没谷が東西方向に入るが現地表面はほぼ平坦である。

参考文献

秋田県『秋田県総合地質図幅 大館』 1973 (昭和48年)

秋田県農政部農地整備課『土地分類基本調査 大館』 1986 (昭和61年)

第2節 歴史的環境

上聖遺跡からは縄文時代前期初頭、中期中葉・後葉、後期前葉・後葉、晚期中葉の土器が出土した。また、縄文時代の土坑群を検出した。ここでは、上聖遺跡の周辺にあって発掘調査され、類似した様相を呈する縄文時代の遺跡を中心に概観する。古代、中世の遺跡については『大館市史』第一巻を参照されたい。なお、文中()内の数字・記号は第1図、第1表と対応し、文献⑩に掲っている。

大館市と比内町には合計164箇所の遺跡が知られている。上聖遺跡周辺の縄文時代の遺跡は第1図の範囲で25箇所で、上聖遺跡(A)を含めて12箇所が発掘調査されている。いずれも米代川と犀川が形成した河岸段丘や低丘陵地などの、沖積地を見下ろす高台に立地する。

縄文時代早期の土器は、北西3.5kmの山館上ノ山遺跡(4-71)、東1.7kmの鳶ヶ長根IV遺跡(4-123)、南西2.6kmの横沢遺跡(12-13)で出土している。山館上ノ山遺跡は前期から中期の集落跡で、地点を換えながら円筒下層a式期から円筒上層b式期までの豊穴住居跡が検出された。前期の捨て場からは膨大な量の遺物が出土したが、茂屋下岱式土器群の編年的位置付けが明確でないものもある。前期前葉の様相は不明な点が多い。円筒下層式土器は、他の多くの遺跡からも出土しているが、それ以前の前期前葉の土器は鳶ヶ長根IV遺跡で、早期末から前期初頭らしい土器が少数出土しているにすぎない。このような中にあって今回上聖遺跡から前期初頭の土器が出土したことは、今回の発掘調査範囲外や周辺遺跡にさらに該期の土器が包蔵されていることを期待させるものである。

中期前葉までは山館上ノ山遺跡や上聖遺跡の北西2.5kmの本道端遺跡(12-19)にみられるように集落が形成されていたことがわかるが、中期中葉の住居跡は検出されていない。円筒上層c～e式土器の出土も比較的少ないが、このころから大木系土器の出土例が増加する。大木8a式、8b式土器は横沢遺跡、本道端遺跡などで出土している。横沢遺跡ではさらに中期後葉の住居跡が検出されている。大木9式土器、中の平田式土器は本道端遺跡や山館上ノ山遺跡などでも出土している。上聖遺跡の土器の中で最も多く出土した大木10式並行期から後期初頭にかけての遺跡は、本道端遺跡があり、発掘調査によって集落跡であることが明らかにされている。

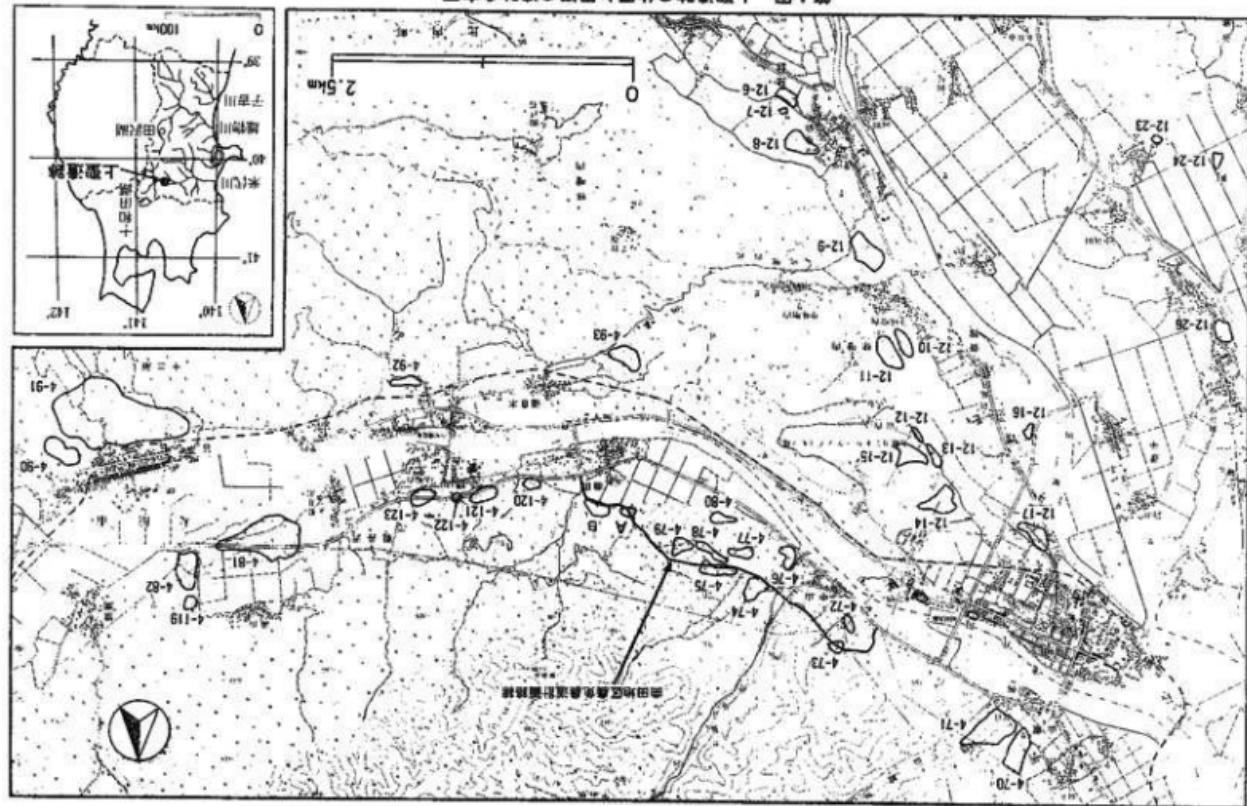
後期前葉では、上聖遺跡の南3.5kmの大日堂前遺跡(12-7)、東3kmの萩峰遺跡(4-81)、山館上ノ山遺跡などがあり、発掘調査により集落跡であることが明らかにされている。これらの遺跡や鳶ヶ長根IV遺跡では袋状土坑を含む土坑群が検出され、上聖遺跡の様相と類似する点もある。

晩期の土器も各地で出土し、上聖遺跡の東側に小谷をはさんで隣接する家ノ後遺跡(B)、東1.4kmの鳶ヶ長根III遺跡(4-122)、山館上ノ山遺跡では発掘調査によって住居跡と土坑群が検

地図番号	遺跡名	所在地	種別	現況	遺構・遺物	所蔵者	文献	地図番号	遺跡名	所在地	種別	現況	遺構・遺物	所蔵者	文献
4-70	山 錦	大館市山錦字越の上	墓 墓	埋 墓	土器群、中世陶器群		⑦◎⑧	4-121	喜々田原山	大館市喜々田原山	墓 墓	通路、墓地	土塼、绳文土器(晚期)、石器	大館市教育委員会	⑨◎⑩
4-71	山錦上ノ山	大館市山錦字上ノ山	墓 墓	埋 墓・墓塚	縄文時代堅穴住居跡、土坑、フラスト状ピット、平安時代堅穴住居跡、绳文土器(前、中、後、晚期)、石器、土器等	大館市教育委員会	②◎③⑤ ①◎④ ⑥◎	4-122	喜々田原山	大館市喜々田原山	墓 墓	通路、墓地	縄文時代堅穴住居跡、土坑、绳文土器(晚期)、石器	大館市教育委員会	④◎⑤
4-72	名 笛	大館市中山字竜毛岱	遺物包含地	景 観 園	绳文土器(中期、後期)、須恵器	田村家	⑩◎	4-123	喜々田原山	大館市喜々田原山	墓 墓	通路、墓地	縄文時代堅穴住居跡、堅壁跡、埋設土器、上層、下坑、绳文土器(中期、後期、後期、晚期)、野生土器	大館市教育委員会	⑤◎⑥⑧
4-73	名 笛	大館市中山字糸沢岱	遺物包含地	景 観 園	绳文土器	田村家	⑩◎	12-6	喜々田原山	北内町喜々田原山3-1号	墓 墓	墓地	墓、空塼		⑩
4-74	糸 沢	大館市中山字糸沢岱	遺物包含地	景 観 園	绳文土器(中期、後期)、須恵器	高橋昭治	⑩◎	12-7	喜々田原山	北内町喜々田原山10号	墓 墓	神社、墓地	堅穴住居跡、溝状遺構、土坑、绳文土器片、土器器片	⑩◎	
4-75	糸 沢	大館市中山字糸沢岱	遺物包含地	景 観 園	绳文土器(中期、後期上層と下層)、石器	田村家	⑩◎	12-8	喜々田原山	北内町喜々田原山22号	墓 墓	山林、墓地	葬、空塼	⑩◎	
4-76	糸 沢	大館市糸沢岱	遺物包含地	墓 墓	绳文土器(前段)、中段、後段(上层)、石器		12-9	喜々田原山	北内町喜々田原山数棟	墓 墓	通路、空塼	绳文土器片(晚期)、土器器片		⑩	
4-77	野沢岱	大館市糸沢岱	遺物包含地	墓 墓	绳文土器(前段)		12-10	喜々田原山	北内町喜々田原山38号	墓 墓	通路	通路、坚穴住居跡、石器、绳文土器片(後期)		⑩	
4-78	野沢岱	大館市糸沢岱	遺物包含地	墓 墓	绳文土器、省庵刀削石器、磨 研磨器	高橋昭治	⑩◎	12-11	喜々田原山	北内町喜々田原山6号	墓 墓	通路	绳文土器片(前期、後期)		⑩
4-79	野沢岱	大館市糸沢岱	遺物包含地	墓 墓	绳文土器、石器、土器類、草木炭		12-12	喜々田原山	北内町喜々田原山2号	墓 墓	通路	平安時代堅穴住居跡、土坑、石器、柱状土器、柱状土器片、绳文土器片(早期、中期)	県埋蔵文化財センター	⑩◎	
4-80	喜々田原山	大館市糸沢岱下坂	遺物包含地	墓 墓	绳文土器(前期、中期、後期)		12-13	喜々田原山	北内町喜々田原山4号	墓 墓	通路	縄文時代堅穴住居跡、土坑、石器、柱状土器、柱状土器片、绳文土器片(中期、後期)	県埋蔵文化財センター	⑩◎	
4-81	喜々田原山	大館市喜々田原山	墓 墓	埋 墓・移 墓・通 路	縄文時代堅穴住居跡、中世牢獄、绳文后土器、土器器、中世陶器等	大館市教育委員会	④◎⑩	12-14	喜々田原山	北内町喜々田原山5号	通路	通路、堅穴住居跡、平安時代堅穴住居跡、土坑、石器、柱状土器、柱状土器片、绳文土器片(前期、中期)	県埋蔵文化財センター	⑩	
4-82	喜々田原山	大館市喜々田原山	遺物包含地	墓 墓	柱状土器、土器		12-15	喜々田原山	北内町喜々田原山12号	墓 墓	通路	北内町喜々田原山12号		⑩	
4-83	十二所古船	大館市十二所字中森	遺 物	移 墓	柱状土器、绳文器		12-16	喜々田原山	北内町喜々田原山1号	墓 墓	通路	堅穴住居跡、土坑、土器器片、土器器片	大館市教育委員会	⑩◎	
4-84	十二所古船	大館市十二所字中森	遺 物	移 墓	柱状土器、绳文器		12-17	喜々田原山	北内町喜々田原山4号	墓 墓	通路	堅穴住居跡、土坑、土器器片、土器器片		⑦◎	
4-85	十二所古船	大館市十二所字中森	遺 物	移 墓	柱状土器、绳文器		12-18	喜々田原山	北内町喜々田原山5号	墓 墓	通路	堅穴住居跡、土坑、土器器片、土器器片		⑩	
4-86	十二所古船	大館市十二所字中森	遺 物	移 墓	柱状土器、绳文器		12-19	喜々田原山	北内町喜々田原山6号	墓 墓	通路	堅穴住居跡、土坑、土器器片、土器器片	大館市教育委員会	⑩◎⑩	
4-87	十二所古船	大館市十二所字中森	遺 物	移 墓	柱状土器、绳文器		12-20	喜々田原山	北内町喜々田原山7号	墓 墓	通路	堅穴住居跡、土坑、土器器片、土器器片	大館市教育委員会	⑩◎	
4-88	十二所古船	大館市十二所字中森	遺 物	移 墓	柱状土器、绳文器		12-21	喜々田原山	北内町喜々田原山8号	墓 墓	通路	堅穴住居跡、土坑、土器器片、土器器片	大館市教育委員会	⑩◎	
4-89	十二所古船	大館市十二所字中森	遺 物	移 墓	柱状土器、绳文器		12-22	喜々田原山	北内町喜々田原山9号	墓 墓	通路	堅穴住居跡、土坑、土器器片、土器器片	大館市教育委員会	⑩◎	
4-90	十二所古船	大館市十二所字中森	遺 物	移 墓	柱状土器、绳文器		12-23	喜々田原山	北内町喜々田原山1号	墓 墓	通路	堅穴住居跡、土坑、土器器片、土器器片	大館市教育委員会	⑩◎	
4-91	十二所古船	大館市十二所字中森	遺 物	移 墓	柱状土器、绳文器		12-24	各地 平原	北内町各地字中森町中26、21	墓 墓	通路	堅穴住居跡、土坑、土器器片、土器器片	大館市教育委員会	⑩◎	
4-92	十二所古船	大館市十二所字中森	遺 物	移 墓	柱状土器、绳文器		12-25	喜々田原山	北内町喜々田原山4号	墓 墓	通路	堅穴住居跡、土坑、土器器片、土器器片		⑩	
4-93	喜々田原山	大館市喜々田原山	遺物包含地	墓 墓	土器器、須恵器、铁斧	大館市教育委員会	⑩◎	B	喜々田原山	大館市喜々田原山2号	墓 墓	通路、台阶	绳文時代堅穴住居跡、土坑、石器、土器器片、绳文土器(中期～晚期)、石器	県埋蔵文化財センター	平成4年 実地踏査報告書 刊行予定
4-119	喜々田原山	大館市喜々田原山	遺物包含地	墓 墓	土坑、柱状土器、绳文土器(前段)	大館市教育委員会	⑥◎⑩								
4-120	喜々田原山	大館市喜々田原山	遺物包含地	墓 墓	土坑、柱状土器、绳文土器(後期)	大館市教育委員会	⑥◎⑩								
A	喜々田原山	大館市喜々田原山	遺物包含地	墓 墓	土坑、柱状土器、绳文土器(前段～晚期)、石器	本古									

第1表 周辺遺跡一覧表

図1 四種の車両の車窓と車内からの車輪を示す



出され、集落跡であることが明らかにされている。

ところで上聖遺跡のある舌状台地の西方には、東西約1.5km、南北約500m、標高85m～92mの台地が広がっている。この台地は南北方向に延びる中山沢の沖積地への出口付近から、東に入る3本の沢によって区切られ、東から西に延びる細長い舌状台地が3列連なる地形となっており、周知の7遺跡が存在する。これらの遺跡はいずれも未発掘であるが、遺跡の内容が明らかになれば、十二所から山館に至る米代川右岸の河岸段丘や低丘陵地に立地する遺跡が、地理的にはほぼ連続して解明されることになり、当該地域の縄文時代の様相がより明確になるものと考えられる。曲田地区農免農道の路線は最も北側の舌状台地（冷水山根台地）を通る計画があり、今後埋蔵文化財の保護に留意した対応が必要である。

註 山館上ノ山遺跡は合計7回の発掘調査が行われ、様々な遺跡名で報告されている（文献②③⑤①⑫⑬⑭⑯）。本書は最近の大館市教育委員会による詳細分布調査（文献⑯）及び秋田県教育委員会作成の遺跡地図（文献⑯）に掲った。

参考文献

- ①比内町教育委員会 「真館緊急調査報告書」 1973（昭和48年）
- ②大館市教育委員会 「大館市山館「上ノ山遺跡」発掘調査報告書」 大館市史編さん調査資料第15集 1975（昭和50年）
- ③秋田県教育委員会 「秋田県遺跡地図」 1976（昭和51年）
- ④比内町教育委員会 「谷地中「館」遺跡発掘調査報告書」 1978（昭和53年）
- ⑤大館市史編さん委員会 「大館市史」第一巻 1979（昭和54年）
- ⑥秋田県教育委員会 「国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第84集 1981（昭和56年）
- ⑦秋田県教育委員会 「秋田県の中世城館」 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56年）
- ⑧比内町教育委員会 「大日堂前遺跡発掘調査報告書」 1982（昭和57年）
- ⑨比内町教育委員会 「比内町埋蔵文化財調査報告書 本道端遺跡」 1986（昭和61年）
- ⑩秋田県教育委員会 「味噌内農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一袖ノ沢遺跡・横沢遺跡」 秋田県文化財調査報告書第169集 1988（昭和63年）
- ⑪秋田県教育委員会 「国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I－上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－」 秋田県文化財調査報告書第173集 1988（昭和63年）
- ⑫秋田県教育委員会 「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II－上ノ山Ⅱ遺跡 第2次調査－」 秋田県文化財調査報告書第193集 1990（平成2年）
- ⑬大館市教育委員会 「秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書」 1990（平成2年）
- ⑭秋田県教育委員会 「国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV－上ノ山Ⅰ遺跡 第2次調査－」 秋田県文化財調査報告書第211集 1991（平成3年）
- ⑮秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第217集 1991（平成3年）
- ⑯秋田県教育委員会 「秋田県遺跡地図（県北版）」 1991（平成3年）

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

上堀遺跡は南東に張り出す舌状台地上にある。地元では以前、台地の東側の溜池の周辺から土器が出土したという話があり、遺跡の範囲は舌状台地全体に及ぶものと推測される。

遺跡の範囲内では、南側の沖積地から段丘崖を切り崩して台地上に上がる農道が遺跡中央部を南北に横切っており、さらに農道より西側は果樹園造成による削平を受けている。今回の調査地点は農道より東側の一部で、調査面積は760m²である。この地点は舌状台地の南縁と中央部の一部にあたる。調査区の中央部で幅約15m、深さ約2mの埋没谷の一部が検出されたが、農道の露頭や、農道西側の果樹園で範囲確認調査時に試掘した結果から、この埋没谷はほぼ台地の南縁に沿う方向で延び、東側に開口すると推測された。従って舌状台地の面する東側の侵食谷の小枝谷が埋没したものと考えられる。

発掘調査の結果、土坑17基、配石遺構1基、焼土遺構1基を検出し、縄文土器41点、石器類33点が出土した。土坑14基と焼土遺構・配石遺構は舌状台地の南縁部付近に集中し、遺物もその範囲で多く出土した。土坑では、断面形が袋状を呈し埋土が自然堆積であるもの6基が、調査区の北東際に並ぶように検出された。本遺跡の中で発掘調査した範囲はこのような縄文時代の貯蔵穴と考えられる袋状土坑群が主体をなすものと推測される。

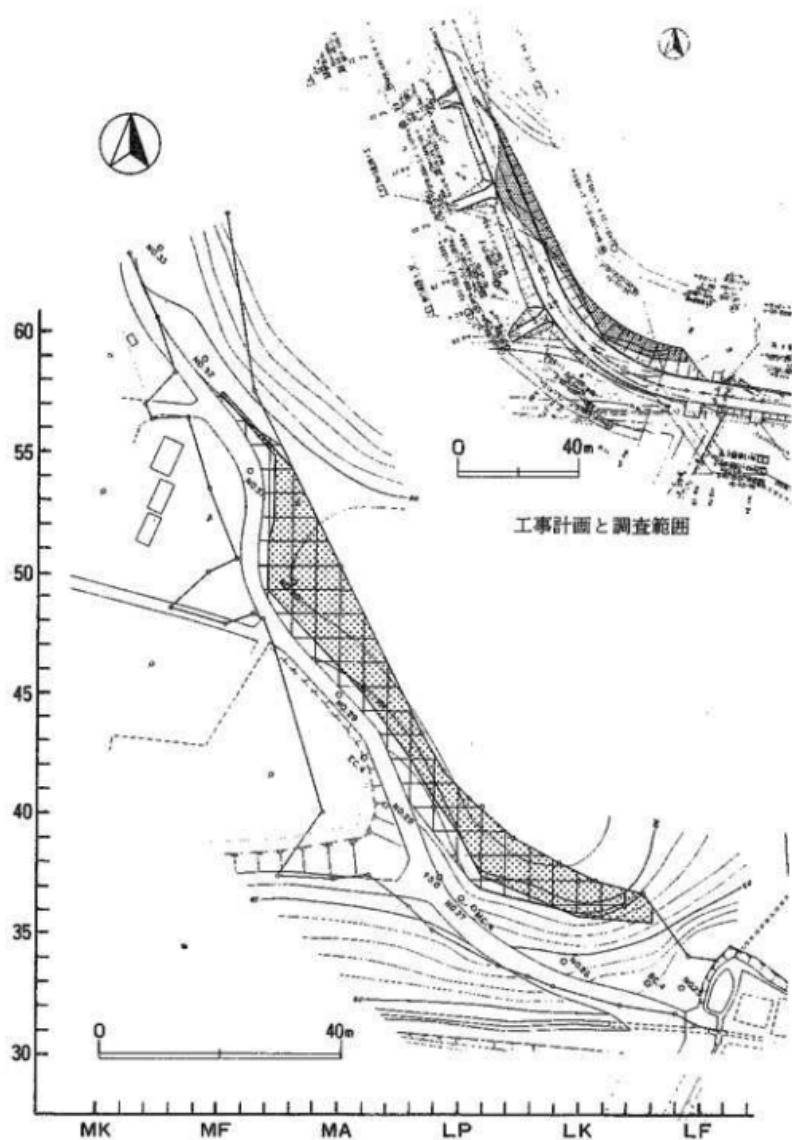
土器は縄文時代前期初頭から晩期までの土器片が出土したが、量的には中期後葉のものやや多めである。遺構から出土した遺物の中では時期の判明するものは少なかった。焼土遺構からは、まとめて焼かれたものと推測される火熱を受けた縦型石匙など5点の石器が出土した。

第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法は、調査区内の任意の点1箇所（国家座標第X系X=24,071.0315、Y=-17,585.5948）を選定し、これをグリッドの起点MA50とした。MA50から磁北を求めて南北基線を設定し、それと直交する東西基線から、4m×4mのグリッドを設定し、9箇所の杭を仮レベル原点とした。グリッド杭には、東から西に向かって東西方向を表すLD…LT・MA…MHというアルファベットと、南から北に向かって南北方向を表す49・50・51…の2桁の数字を組み合わせた記号を記入し、4m×4mの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした。真北はグリッドの南北基線から4度22分42秒東にかたよっ



第2図 造跡周辺地形図



第3図 調査範囲図

ている。

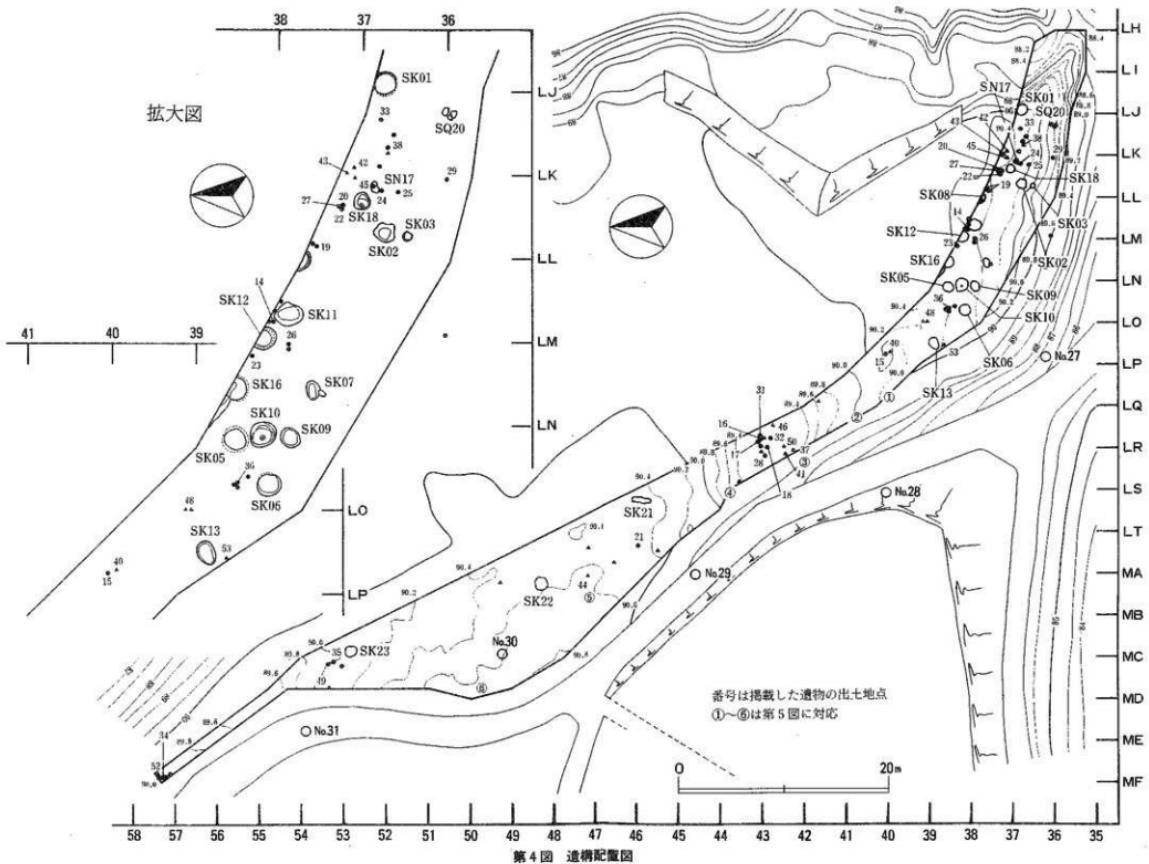
遺物は、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構内出土のものは、出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺構は、長軸に沿って二分割して調査した。調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は、基本的には $1/20$ の縮尺で作図した。写真撮影は、35mmのモノクロとリバーサルフィルムを使用した。

室内における整理は、遺構は現場で取った平・断面図より第2原図を作成し、これをトレースした。遺物は洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

第3節 調査の経過

平成3年4月9日～10日の現況視察と作業員手配依頼の後、5月13日から6月8日まで発掘調査を行った。

- 5月13日 プレハブ設置、刈払い、発掘機材搬入の後、調査前の近景を撮影した。
 - 5月14日 調査区東側の斜面から粗掘を開始。縄文土器片2点出土。
 - 5月15日 調査区東側の粗掘をほぼ終了し北側に入る。
 - 5月21日 調査区東側全体をV層上面まで掘り下げ、土坑10基、焼土遺構1基を検出。このうち4基は調査区外にまたがっている。
 - 5月22日 遺構精査を開始。確認状態の撮影後半戦する。
 - 5月24日 調査区南東部で偏平な大礫3個がまとまって検出された(SQ20)。
 - 5月25日 北側でも2基の土坑を検出したが、遺構・遺物とも少ない。
 - 5月29日 焼土遺構を断ち割ったところ、焼土中から不定形石器などが4点出土した。
 - 5月30日 遺構の精査を終了。
 - 5月31日 全体撮影。土坑のうちの倒木痕や攪乱坑を除くと、遺構は土坑17基、焼土遺構1基、配石遺構1基を検出した。
 - 6月3日 遺構実測と地形測量に入る。出土遺物の水洗いも行った。
 - 6月7日 地形測量を終了。発掘機材の一部を家ノ後遺跡に移し、撤収作業を行った。
 - 6月8日 本日で発掘調査の現場作業を終了。
- この後、埋蔵文化財センターで、遺物、写真、図面類の整理作業を行い、報告書を作成した。



第4章 調査の記録

第1節 基本層序

本調査区の層序は基本的に I ~ VI 層に分かれる。

I 層は表土層である。腐植質で植物根が多く入り込み孔隙が多い。調査区北側で厚く (50~60 cm)、東側になるにしたがって薄い (20~30 cm)。

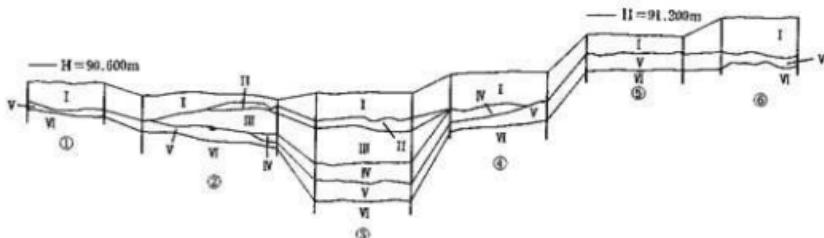
II 層は大湯浮石層である。調査区中央部に東西方向に入る埋没谷の堆積土上部にのみレンズ状に存在する。層厚は最大でも 10cm 程度で、南側・北側はしだいに薄くなって I 層と III 層の境界に線状に入り、東側の遺構の集中する区域付近及び北側付近の LT ラインでは消失する。

III 層はいわゆる黒ボク土である。埋没谷では 40~50cm と最も厚く堆積し、南北にしだいに薄くなる。調査区の南西側の斜面では消失するが北東側では 10~20cm の層厚を保つ。本層は SK 08 土坑・SK 12 土坑の上部を覆っている。

IV 層は埋没谷の下部と調査区東部に認められる。III 層よりもやや褐色がかった土色である。埋没谷内では 20~30cm の層厚で、III 層・V 層との境界は整合する。調査区東側では 10~20cm の層厚で、III 層との境界は不整合である。SK 12 土坑・SK 16 土坑は本層上面から掘りこまれている。

V 層は地山漸移層である。層厚は 10~20cm である。I 層、III 層、IV 層と接する。境界は不整合である。遺構の多くが本層上面で確認された。

VI 層 (地山) は軽石と凝灰質の小角礫が混じる黄褐色シルトである。



基本層位

- I. 黒色土 (7.5Y R2/1) 士土、縮まりあり。無粒砂を少量含む。
- II. 明褐色土 (7.5Y R5/6) 大湯浮石層。礫塊が主体であるが微粒のもの少、小粒のものわずかに含まれる。鉢部分にのみ確認される。部分的 (一番四んだ所) に遮るか拘束作用が見られる。
- III. 黒色土 (10 Y R2/1) 縮まりあり。
- IV. 黑褐色土 (10 Y R2/1) 縮まりあり。Ⅲと似ているが、Ⅲに比較して褐色味が強い。
- V. 明褐色土 (10 Y R3/4) 地山漸移層。よく縮まり密度を含み粘性あり。平沢部の漸移層はやや明るい土色である。
- VI. 黄褐色土 (10 Y R5/6) 地山。

第5図 基本層位図

第2節 検出遺構と遺物

1 土坑

土坑は17基を検出した。個々の土坑の位置、形態、測定値等は第6～11図、図版4～11及び第2表に掲載した。

土坑は、形態から次の4種類に分類できる。

a類 平面形が円形で、断面形が袋状を呈し、深めの土坑。

S K01、05、06、08、12、16

b類 平面形が円形または不整円形で、断面形が鍋底状を呈し、浅めの土坑。

S K02、09、11、13、18

c類 円筒形の形態で、底面にピットがある深い土坑。

S K10

d類 その他

S K03、07、21、22、23

これらのうち機能が推測できるものは、a類とc類である。

a類は、埋土が自然堆積であること、標識的な配石や立石を伴わないこと、土坑内にベンガラが入っていないこと、埋土中、底面とも遺物がきわめて少ないとから、土塙墓とは考えられず、貯蔵穴の可能性が強いと思われる。

c類は、円筒形で底面中央に柱穴状の小ピットをもつことから、縄文時代の陥し穴と考えられる。

土坑は、調査区中央を横切る埋没谷の南側の台地南縁に14基が集中し、調査区北側には3基が散在する。袋状土坑群（a類）は調査区の北東際に6基が並ぶように検出された。袋状土坑群は調査区の北側にさらに広がっていると推測される。おそらくこの埋没谷よりも南東側の台地突端部に集中して構築されたのであろう。

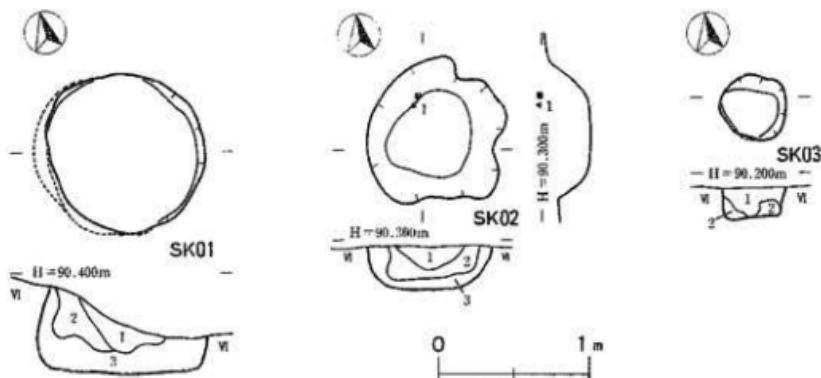
土坑内から出土した遺物は少量で、時期の判明する遺物はS K16土坑埋土中の土器片のみである。

第6図1は、S K02土坑確認面上から出土した寛状石器である。横長剥片を素材とする。両側縁の裏面中央部にある剥離面を打面として表面に調整剥離を施すが、打面形成のための剥離はS N17焼土遺構出土石器など（第12図9、10、第15図38）のような直角に近い深い角度ではなく、角度が浅く、剥離痕も大きい。

第7図2はS K05土坑、3はS K06土坑から出土した。2は砂岩の円礫の一辺に擦痕がある。3は棒状礫の表裏画面に各2箇所の凹部があり、さらに両側面にも敲打痕が認められる。

土坑	検出グリッド	検出面	平面形	断面形	上端部径(m)	底部径(m)	深さ(m)	埋土状態	壁の凹凸	底面の状態	出土遺物	備考
SK01	LK36・LK36	V層	円形	袋状	1.13×1.02	1.06×1.01	0.55	自然堆積	ややあり	平坦	なし	底面から約15cm上で最大径(1.14m)。
SK02	LK36	V層	不整円形	鍋底状	1.12×0.91	0.62×0.53	0.29	自然堆積	ややあり	平坦	笠状石器1 礫石1	遺物は確認面上から出土。
SK03	LK36	V層	不整円形	円筒形	0.46×0.44	0.39×0.32	0.20	人為堆積?	あり	やや凹凸あり	なし	
SK05	LN38	V層	円形	袋状	1.12×1.00	1.23×1.18	0.84	自然堆積	ややあり	平坦	磨石1	遺物は確認面上から出土。底面から約18cm上で最大径(1.33m)。頭部径1.02m。
SK06	LN38	V層	円形	袋状	1.14×1.06	0.98×0.96	0.43	自然堆積	ややあり	平坦	凹石1	遺物は埋土中から出土。
SK07	LM37	V層	椭円形	逆台形	0.91×0.63	0.75×0.34	0.42	人為堆積	あり	平坦	なし	南側に斜接して42(長)×31(幅)×18(厚)cmの大跡がV層上からV層にかけて置かれており、SK07もV層上から掘りこまれていた可能性がある。
SK08	LK37・LL37	V層	(円形)	袋状	1.04×(1.10)	0.94×(0.80)	0.95	自然堆積	僅かに あり	平坦	石核1	遺物は埋土下部から出土。他に凝灰岩の角礫も出土。1/2以上が調査区外。頭部推定径0.86m。
SK09	LN37	V層	不整円形	鍋底状	0.96×0.89	0.85×0.76	0.22	自然堆積	あり	やや凹凸あり	なし	
SK10	LM38・LN38	V層	不整円形	円筒状	1.34×1.12	0.99×0.78	1.04 (ピット 底面まで は1.44)	自然堆積	あり	平坦	なし	底面ほぼ中央に径20cm、深さ40cmの小ピットあり。
SK11	LL37・LL38	V層	椭円形	鍋底状	1.38×1.16	1.07×0.66	0.34	自然堆積	あり	あり	なし	
SK12	LL38・LM38	V層	(円形)	袋状	1.12×(1.10)	1.00×(0.90)	0.64	自然堆積	ややあり	平坦	なし	1/3が調査区外。頭部径0.78m。
SK13	LO38	V層	椭円形	鍋底状	1.14×0.81	1.02×0.67	0.17	自然堆積	ややあり	ほぼ平坦	なし	
SK16	LM38	V層	(円形)	袋状	1.15×(1.00)	1.20×(1.15)	0.96	自然堆積	僅かに あり	平坦	縄文土器2 剝片1	土器は埋土中位、剝片は埋土下部から出土。 1/4が調査区外。頭部径1.07m。倒木痕と重複する。土坑の一帯は倒木痕の黒色土部分を掘り込んでおり、本土坑が新しい。
SK18	LK36・LK37	V層	不整円形	鍋底状	0.80×0.78	0.57×0.40	0.22	自然堆積	ややあり	ややあり	なし	
SK21	LS45・LS46	V層	圓丸長方形	台形	1.77×0.57	1.83×0.44	0.25	人為堆積?	ややあり	ややあり	なし	
SK22	MA48	V層	円形	鍋底状	1.30×1.18	1.12×1.10	0.28	人為堆積	あり	ややあり	なし	
SK23	MB52	V層	不整円形	鍋底状	1.10×1.08	0.85×0.83	0.27	人為堆積	あり	ややあり	なし	

第2表 土坑一覧表



SK01

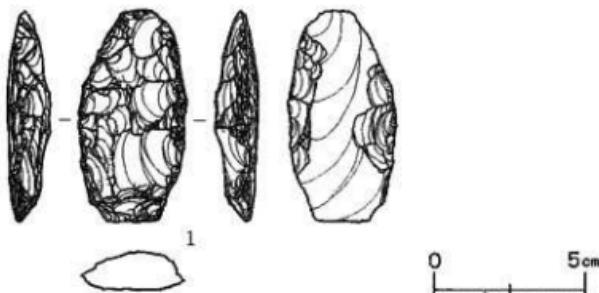
- 1 黒色土 (10Y R2/2) 地山細粒少量含む。緑まりなし。
2 濃褐色土 (10Y R2/3) 地山土少量含む。緑まりやなし。
3 増褐色土 (10Y R3/4) 緑まりあり。地山崩壊土を多量に含む。

SK02

- 1 黒色土 (10Y R1.7/1) やや緑まりあり。地山小粒少量含む。
2 黒色土 (10Y R2/2) やや緑まりなし。地山小粒少量含む。
3 黒褐色土 (10Y R3/2) やや緑まりなし。地山土多量に含む。
※下層になるに従って地山崩壊土の混入が多くなる。

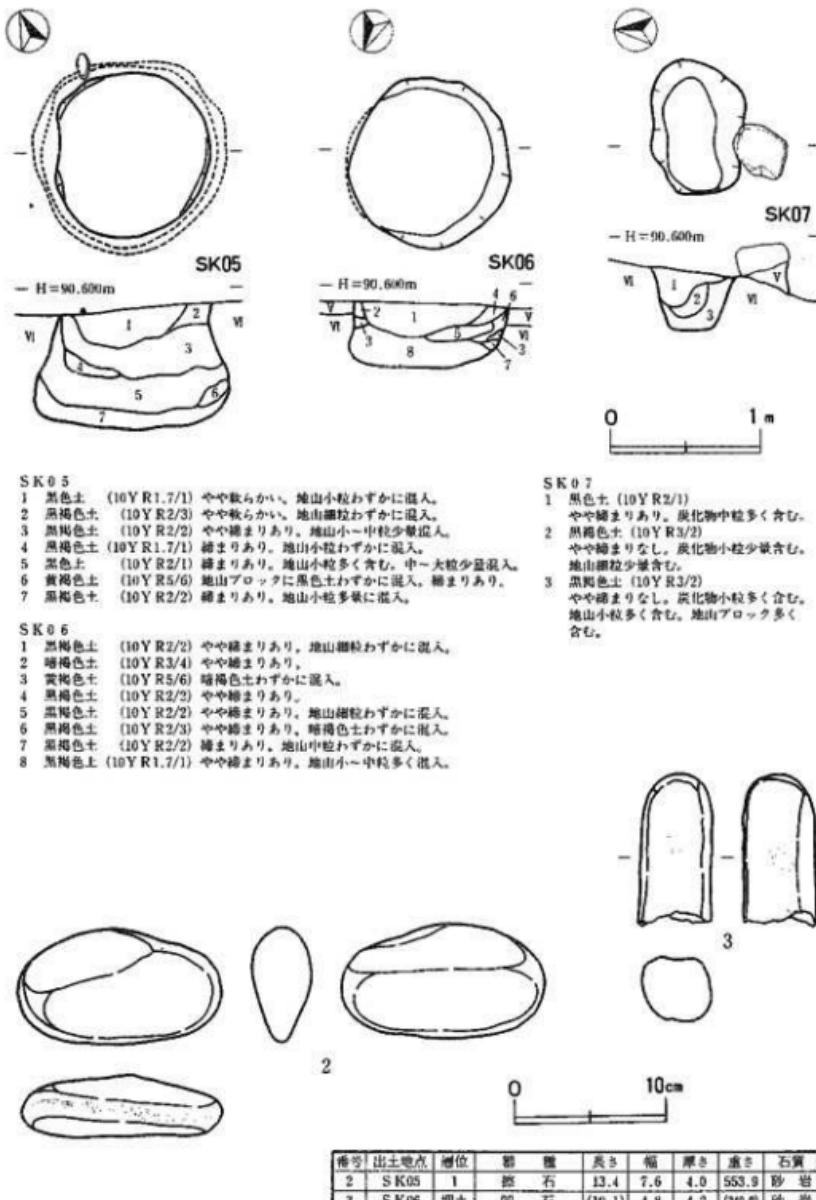
SK03

- 1 黒褐色土 (10Y R3/2) 地山灰少量含む。緑まりやなし。
2 明黄褐色土 (10Y R6/6) 増褐色土少量含む。地山崩壊土が小ブロック状に入る。

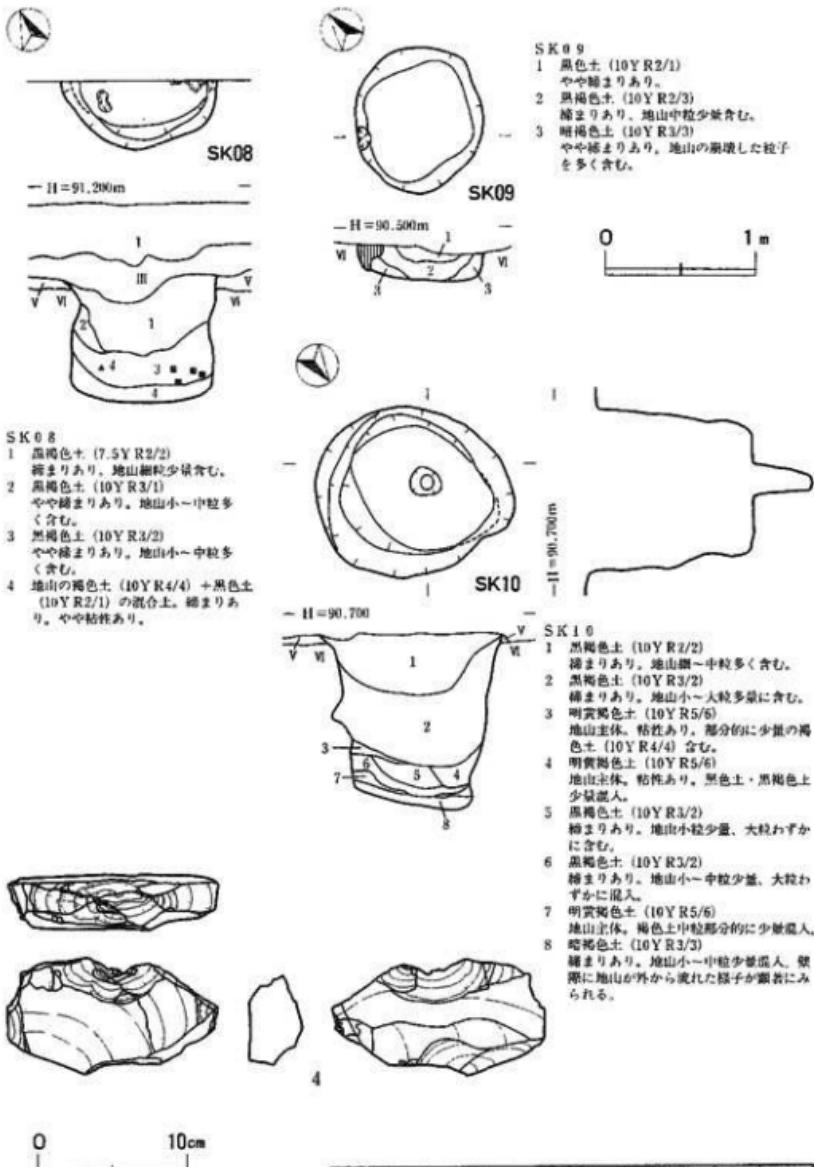


番号	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質
1	SK02	1	圓柱石器	7.0	3.6	1.3	32.5	頁岩

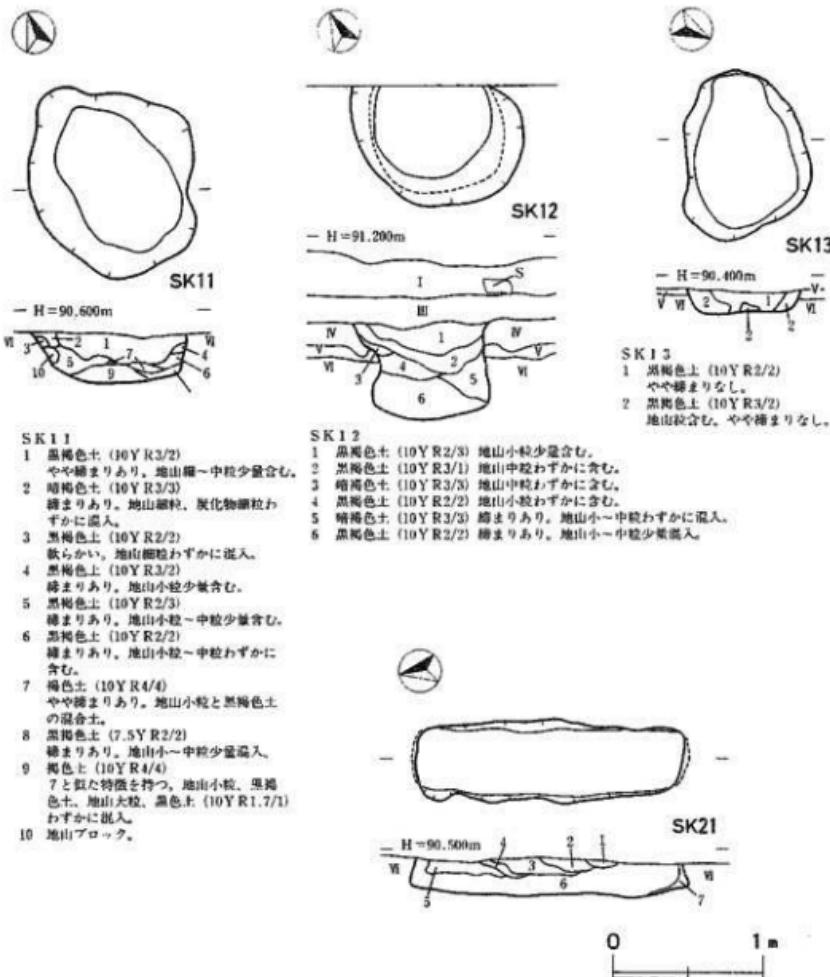
第6図 SK01・02・03土坑、SK02土坑出土石器



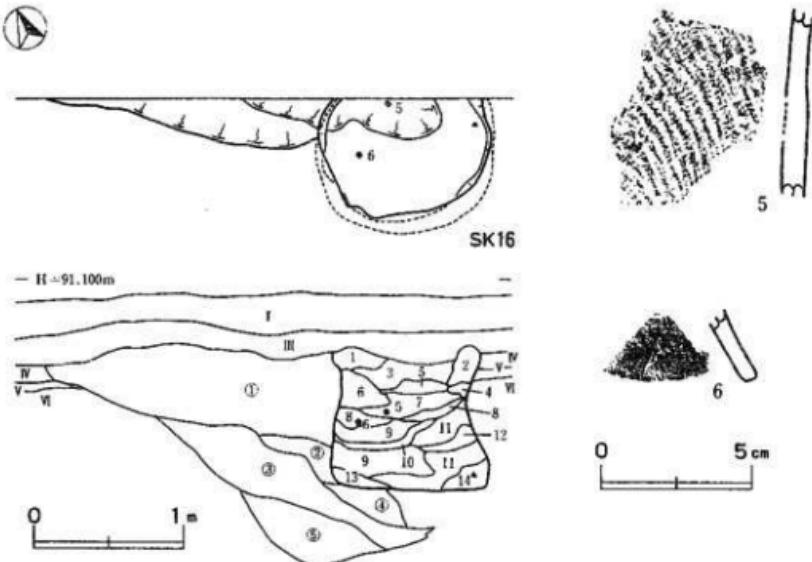
第7図 SK05・06・07土坑、SK05・06土坑出土石器



第8図 SK08・09・10土坑、SK08土坑出土石器



第9圖 SK11・12・13・21主接



SK16

1 黒褐色土 (10Y R3/2) やや縮まりあり。地山細粒少量含む。
2 黒褐色土 (10Y R2/3) 縮まりあり。10Y R4/4褐色土 (地山崩壊土) を多く含む。田筋の口頭部が崩落したものである。

3 黒褐色土 (10Y R3/2) やや縮まりあり。地山細粒少量含む。

4 褐色土 (10Y R4/4) 縮まりなし。口頭部の崩壊により、地山土がアロック状になったものである。

5 黒褐色土 (10Y R2/3) やや縮まりあり。地山細粒わずかに含む。

6 黒褐色土 (10Y R2/3) やや縮まりあり。地山細粒わずかに含む。部分的に地山崩壊土がアロック状に入る。

7 黒褐色土 (10Y R3/2) 縮まりなし。地山細粒少量含む。

8 黒褐色土 (10Y R2/2) やや縮まりなし。地山細粒わずかに含む。

9 黒褐色土 (10Y R3/2) やや縮まりなし。地山細粒わずかに含む。

10 黒褐色土 (10Y R2/2) やや縮まりなし。地山中粒を少量含む。地山上が崩壊して混入したものである。

11 黒褐色土 (10Y R2/3) 縮まりなし。地山中粒を少量含む。地山上が崩壊して混入したものである。

12 黒褐色土 (10Y R2/2) 縮まりなし。地山小粒を少量含む。

13 増褐土 (10Y R3/3) 縮まりなし。地山中粒を多く含む。

14 黑褐色土 (10Y R2/2) 縮まりなし。地山崩壊土をアロック状に多量に含む。壁の崩落によるものである。

① 黒褐色土 (10Y R2/2) やや縮まりなし。地山小粒少量含む。

② 黒褐色土 (10Y R2/2) 縮まりなし。地山崩壊土をアロック状に多量に含む。

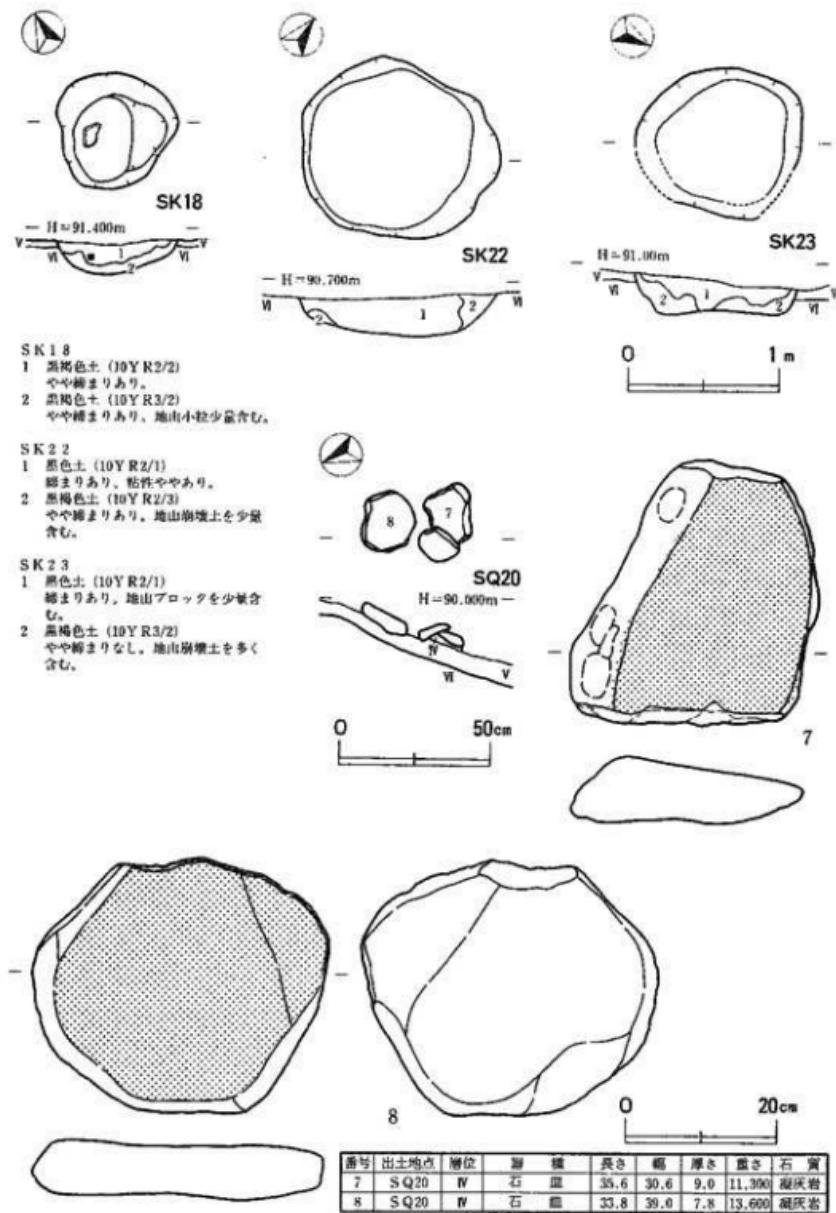
③ 黒褐色土 (10Y R2/3) やや縮まりなし。黒褐色土と地山の崩壊土が傾斜に沿って、斜めの層状に互層に堆積している。それぞれ層厚は10~5 cm。地山小粒が少量混じる層など多様である。

④ 黄褐色土 (10Y R7/8) やや縮まりなし。地山土が崩壊に入りこんだものである。黒褐色土を層状にわずかに含む。地山上が崩壊気味で、やや縮まりがない。

⑤ 明黄褐色土 (10Y R6/6) 縮まりなし。地山崩壊土中に傾斜に沿って黒褐色土が層状に薄く入る。

番号	出土地点	層位	部位	調査原体	回復方向	文 様	付着物・その他	時 期
5	SK16	7	脛 部	RL(多条)	横	圓文のみ		不 明
6	SK16	8	台 部			無文		後期生葉

第10図 SK16土坑と出土土器



第11図 SK18・22・23土坑、SQ20配石造構と出土石器

第8図4はSK08土坑から出土した石核である。表裏両面とも風化した節理面である板状の石材の周縁を打ち欠き、そのうちの一辺を打面として、打点を変えずに表裏両面から剥片剥離を行っている。良好な目的的剥片は剥取できなかつたとみえ、打面を変えることなく剥片剥離を終了している。

第10図5・6はSK16土坑の埋土中から出土した。5は0段多条のRL繩文が施文されている。焼成は良好である。6は台付鉢形土器の台部と思われる。

2 配石遺構

S Q20 (第11図、図版11)

調査区南東端のLK35・36グリッドのV層上面で検出した。扁平な大礫3個からなっており、そのうちの2個は重なり合っている。3個中2個は片面が平坦に磨られており、中央部がわずかになだらかに凹んでいる。

3 焼土遺構

S N17 (第12図、図版12)

調査区東部のLK36グリッドで検出した。53cm×44cmの不整形の範囲でV層の上面から焼けており、V層とVI層に焼土が形成されている。

焼土中から4点の石器が出土した(第12図10~13)。この焼土遺構は、既に前年度の遺跡範囲確認調査時のトレンチで検出されていたもので、その際にも焼土上部で縦型石匙が1点出土していたので(第12図9)、計5点の石器が焼土に包含されていたことになる。

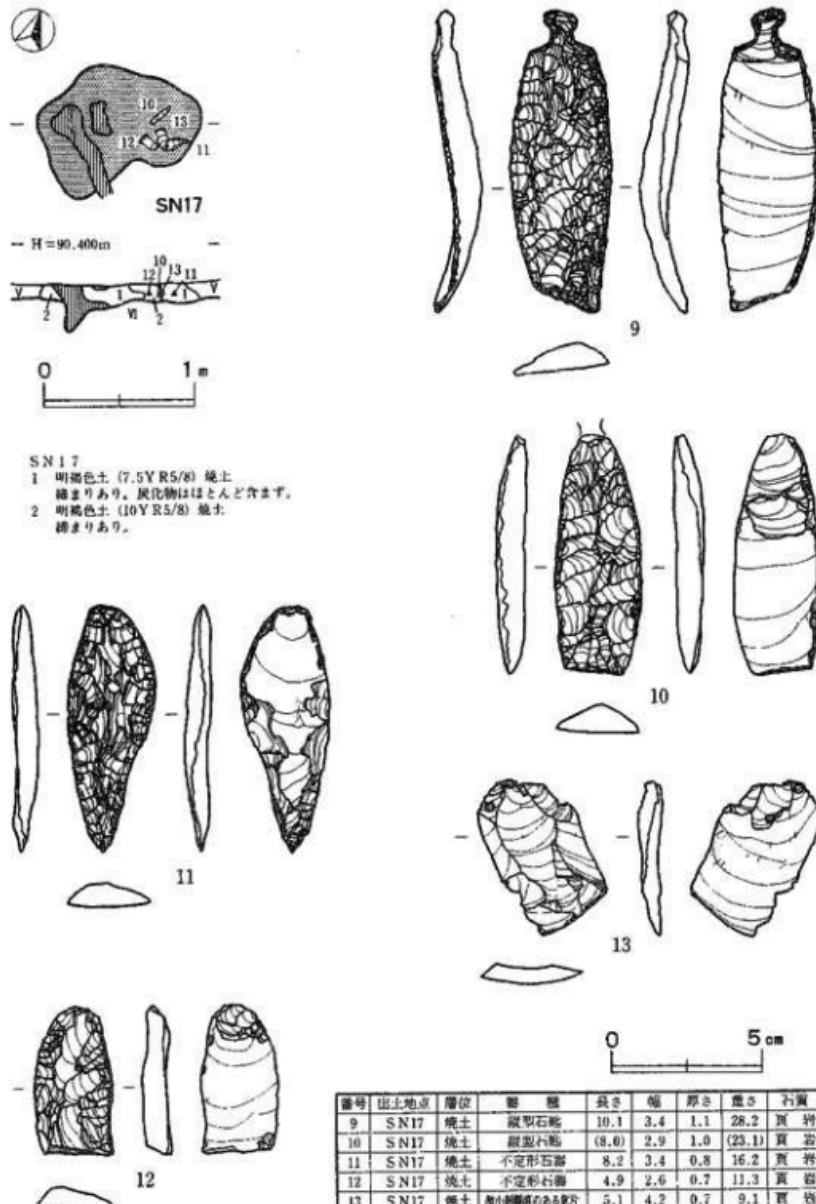
第12図9は縦長剥片を素材とした大型の縦型石匙で、表面右側縁が刃部である。左側縁の裏面には、急角度の短い剥離痕があり、これを打面として表面側に長めの押圧剥離を行う「打面調整剥離技法」が認められる。表裏とも一部に受熱による黒変部分がある。

10もやや厚手の縦長剥片を素材とする縦型石匙で、つまみ部分を欠失する。刃部は右側縁である。刃部の右側縁の中央部には、使用による微小剥離痕が観察される。表面左側縁と末端は「打面調整剥離技法」で製作されている。

11は薄手の縦長剥片を素材とし、右側縁には「打面調整剥離技法」が認められる不定形石器で、表面左側縁及び先端部が刃部である。

12は縦型剥片の末端を折り取り、表面全面に調整剥離を施した不定形石器である。表面右側縁が刃部である。

13は縦長剥片の末端表面側に使用痕と思われる微小剥離痕がある。



第12図 SN17焼土造構と出土石器

第3節 遺構外出土遺物

1 土器

遺構外出土土器は39点である。これらは、遺構の集中するL I～L Oグリッドと埋没谷中から多く出土した。地点別、種類別の出土破片数は第3表に掲載した。時期の判明したものの中では中期後葉のものが多いが、前期初頭、中期中葉、後期前葉、後期後葉、晚期中葉のものもある。縄文のみが施文された土器の多くも器厚、胎土、焼成等からみて中期に属する可能性が高い。

第13図14は丸底の底部破片で、胎土に纖維と細粒砂を含んでおり、前期初頭の土器である。この種の土器はSK11土坑、SK12土坑の周辺で図示した14も含めて計3点出土した。

15は大木8號土器である。他種の土器や遺構群とはやや離れて1点のみ出土した。

16～22は中期後葉の特徴である太い沈線による区画文の施文された土器である。モチーフは不明である。SK08土坑、SK18土坑の周辺と埋没谷中から出土した。

23はLR繩文を施文した後、細い沈線で曲線文様を描く後期前葉の土器である。SK12土坑の近くで出土した。24は口唇部に突起をもち、横位沈線で区画された繩文帯と無文帯のある後期後葉の土器である。25は台付鉢形土器の台部破片である。24・25はSN17焼土遺構の近くで出土した。

第14図26～34は縄文のみが施文された土器片である。35は全面にL燃糸文が施文されている。施文の1単位は10条で、その幅は約3cmである。

36は平底の底部破片で、薄手で胎土に中粒砂を多く含む。磨滅していく文様は不明である。

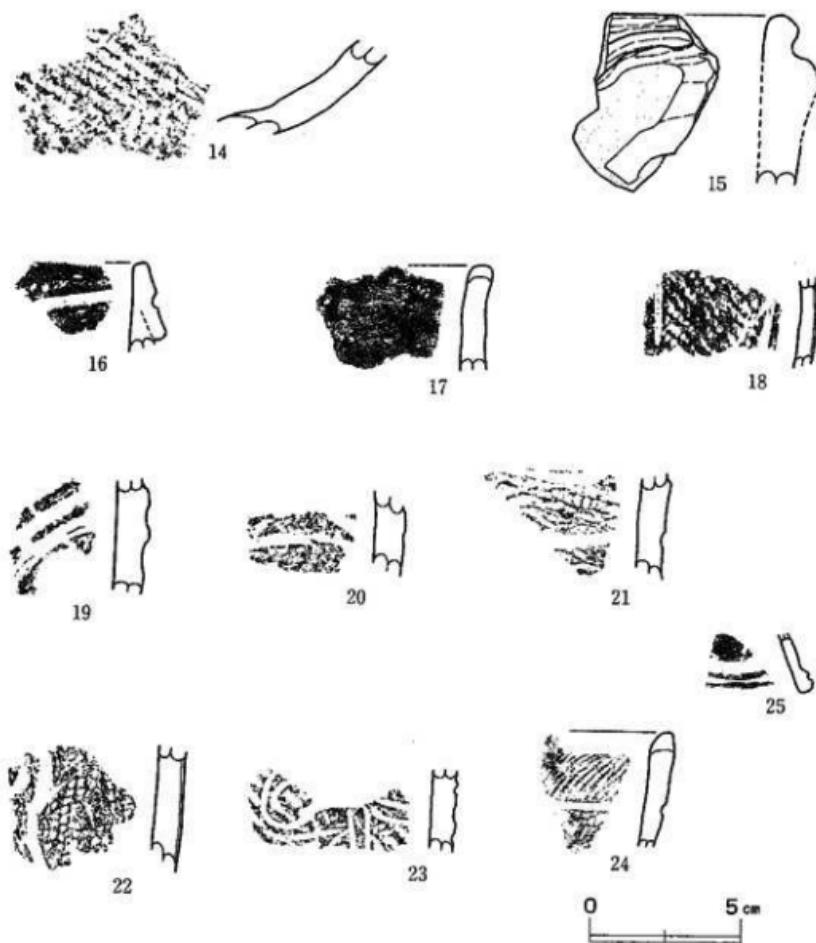
2 石器

遺構外出土の石器類は21点である。地点別、種類別の出土点数は第3表に掲載した。石器類の出土地点は調査区南東の土坑群の東と西及び調査区中央部の埋没谷内の3箇所に集中し、調査区北側にも散在する。

第15図37は小型の石槍である。基部右側は素材の節理面を利用し、表裏両面の中央部にも節理面が残る。

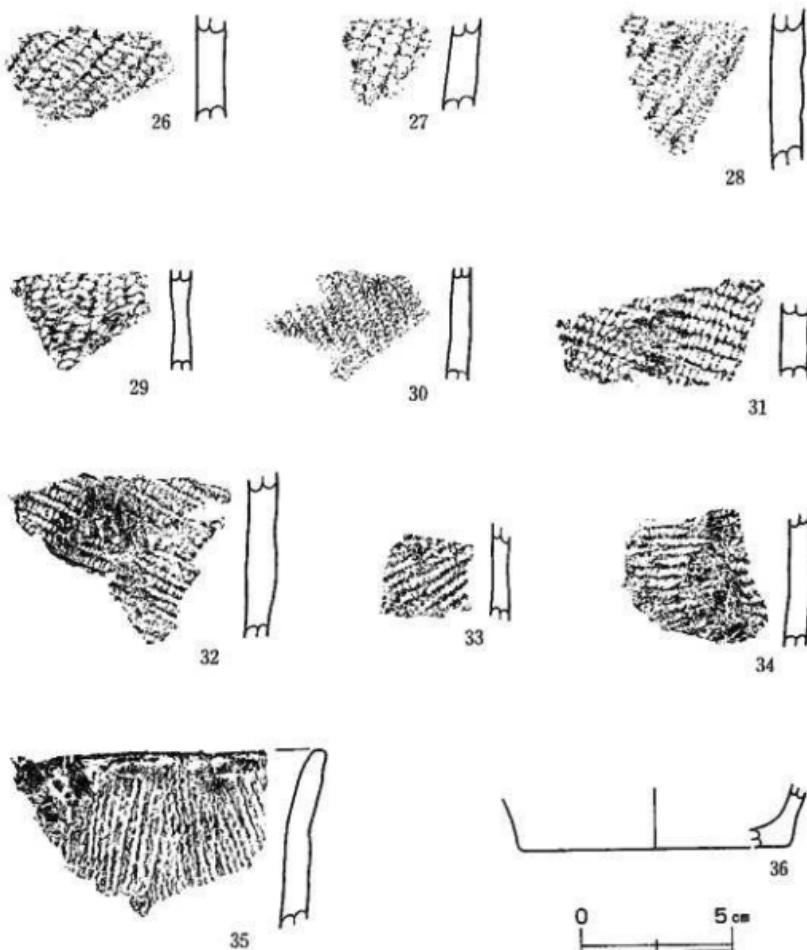
38は表面左側縁が「打面調整剥離技法」によって製作された綱型石匙である。表面右側縁が刃部である。刃部の中央ややつまみ部寄りの部分に凹部があり、その上下は階段状剥離痕が著しい。これは使用による刃部の損耗であろう。

39～45は使用痕と思われる微小剥離痕のある剝片である。剝片の末端に微小剥離痕のあるもの(39、41、44)と剝片の側縁にあるもの(40、42、43、45)がある。



番号	出土地点	層位	部位	縄文原体	回転方向	文様	付着物・その他	時期
14	L T38	II	底部	RL(多角)	横	縄文のみ	胎土に擦痕・泥粒含む	前期初期
15	L O40	I	口縁部			口唇部太沈縫		中期中期
16	L Q43	IV	口縁部			口縁部太沈縫	折り返し口縁	中期後期
17	L Q43	IV	口縁部			無文	波状口縁	中期後期
18	L Q42	III	胴部	RL	横	継位太沈縫区面文	外表面化物付着	中期後期
19	L K37	I	胴部			複数太沈縫曲筋区面文		中期後期
20	L K30	I	胴部			複数太沈縫曲筋区面文		中期後期
21	(L T45) (鉋形)	I	胴部	LR	継	縄文一太沈縫曲筋文		中期後期
22	L K37	I	胴部	RL	継	縄文一太沈縫曲筋文		中期後期
23	L M38	I	胴部	LR	継	縄文一細沈縫文		後期前葉
24	L K36	I	口縁部	LR	継	継位滿文帶と無文帶を沈縫区面	口唇突起	後期後葉
25	L K36	I	台部			横位沈縫文	端部肥厚	晚期中期

第13図 造構外出土土器 (1)



番号	出土地点	層位	部位	調文原体	回転方向	文様	付着物・その他	時期
26	LM37	I	肩部	RL	縦	調文のみ		(中期)
27	LK37	I	肩部	RL	縦	調文のみ		(中期)
28	LP42	IV	肩部	RL	縦	調文のみ		(中期)
29	LK36	I	肩部	RL	縦	調文のみ		(中期)
30	(MF57) (範跡)	肩部	RL	横	横	調文のみ	外面スヌ付着	不明
31	LQ43	IV	肩部	LR	縦	調文のみ		(中期)
32	LQ42	肩部	LR	縦	調文のみ			不明
33	LJ36	I	肩部	LR	横	調文のみ		不明
34	ME57	II	肩部	LR	斜	調文のみ		不明
35	MC53	II	口縁部	L.筒形体	縦	調文系のみ		(後期)
36	LN38	I	底部			(磨滅)		不明

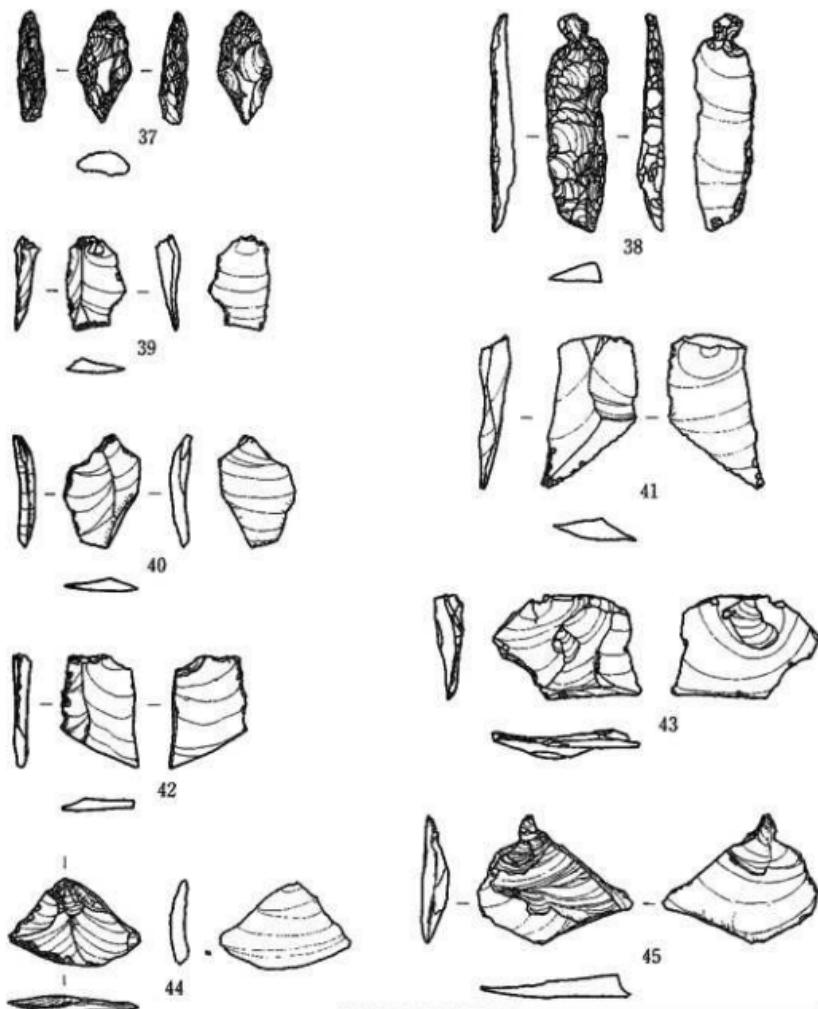
第14図 遺構外出土土器 (2)

40は表面左側縁に微小剝離痕があるが、打面側は欠失している。おそらく使用による折損であろう。41は末端の尖頭部に微小剝離痕がある。42は側縁の微小剝離痕を末端側の折れ面が切っており、使用中に折損したと思われる。44はヒンジの末端に微小剝離痕がある。打面側は折れ面となって欠失するが、折り取りなのか折損なのかは不明である。

46は表面の風化が進んだ石材を用いた石核である。一端を打ち欠いたところで剝離作業は終了し、目的的剥片を剥取するに至っていない。

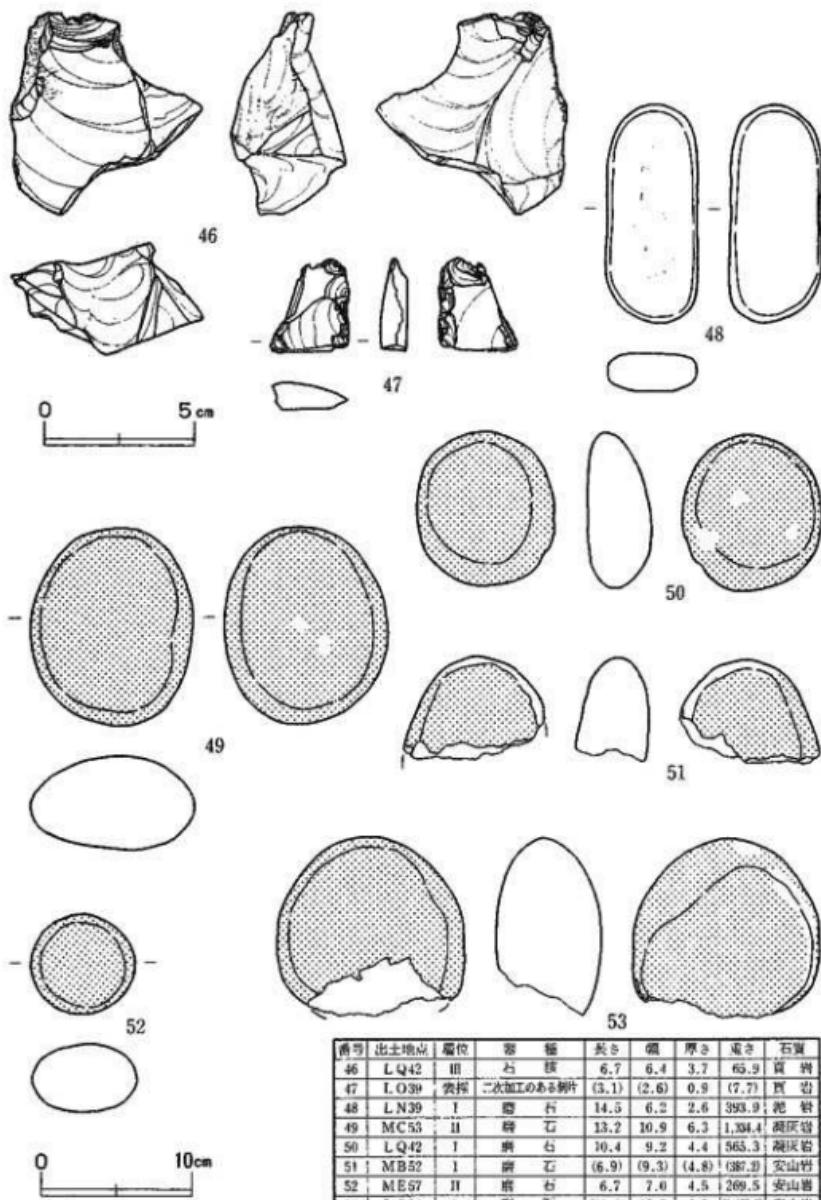
47は左側縁及び下部を欠失する。右側縁は裏面にやや急角度の短い剝離痕があり、それを打面として表面に角度の浅い剝離を施しており、「打面調整剝離技法」が認められる。表面の上部には節理面が残る。小破片で本来の器種は不明ながら、あえて推測すれば窓状石器の基部の一部であろうか。

48～53は礫石器である。48は橢円形の板状円礫の表面に長軸方向の擦痕が認められる。49～53は円礫を使用した磨石である。いずれも両面が磨られている。



番号	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質
37	L R 42	I	石 砧	3.7	1.8	0.9	4.9	真 岩
38	L J 36	II	螺旋石砧	7.2	1.8	0.7	9.9	真 岩
39	MC 46	表揮	微少剥離痕のある剥片	3.1	2.0	0.5	2.3	真 岩
40	L O 39	I	微少剥離痕のある剥片	3.8	2.6	0.5	3.8	真 岩
41	L R 42	IV	微少剥離痕のある剥片	5.2	2.8	0.8	9.9	真 岩
42	L J 37	I	微少剥離痕のある剥片	3.7	2.4	0.4	4.7	真 岩
43	L J 37	I	微少剥離痕のある剥片	3.5	5.0	1.0	9.6	真 岩
44	MA 47		微少剥離痕のある剥片	2.9	4.4	0.7	5.4	真 岩
45	L K 37	II	微少剥離痕のある剥片	4.3	5.1	0.8	10.5	真 岩

第15図 造構外出土石器（1）



第16図 造構外出土石器（2）

出土場所	時期別発生					時期不詳					文書判明小計		土器合計	石器					剣・片		石核合計			
	前期		中期		後期	地層		調査のみ		既故		施文		剥片			石器		剣片					
	前頭	中葉	後葉	前期	後期	中葉	又L (多)	RL	LR	L			石核	鉄製 石器	堅型 石器	不規形 石器	堅形 石器	細長形 石器	石核	剣片	小計			
SK02													0	1						1		1		
SK05													0								1	1		
SK06													0								1	1		
SK08													0								1	1		
SK10													0								1	1		
SK16		1	1	1				1	2				2							1	1	1		
SN17													0		1	2	1	4		4	4	4		
SQ20													0						2	2	2	2		
遺構内計	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	1	2	0	1	1	2	1	5	2	9	0		
LJ36								3		3	3	1	4		1							1	5	
LJ37													0				2	2				2	2	
LK36		1	1	2		1	1					2	4		4							0	4	
LK37		4			4	1						1	5	5		1	1					1	6	
L136													1	1								0	1	
LL38	2				1	3		1				1	4	4								0	4	
LM37	1				1		1					1	2	2								0	2	
LM38		1										1	1									0	1	
LN38								1	1	1	3	4										0	4	
LN39												0					1	1	1			1	1	
LO38												0					1	1	1			1	1	
LO39												0					1	1	1			1	1	
LO40	1				1							1	1					1	1	1	1	2	2	
LP41												0								1	1	1	1	
LQ42	1				1		1					1	2	2				1	1	1	1	3	5	
LQ43	2				2		1		1	2	4	4									0	4		
LR42					1							1	1	1	1							1	2	
LR43												0								1	1	1	1	
LT45												0								1	1	1	1	
LT46												0								1	1	1	1	
LT47												0								1	1	1	1	
MA49												0								1	1	1	1	
MB32												0					1	1	1			1	1	
MC48												0								1			1	
MC53								3		3	3	3					1	1				1	4	
ME57								3		3	3	3						1	1			0	3	
遺構外計	3	1	7	1	1	2	15	0	4	10	3	2	19	34	5	39	1	0	1	0	5	7	8	60
合計	3	1	7	1	2	2	16	1	4	10	3	2	29	36	5	41	1	1	2	2	6	12	21	74

第3表 地点別出土遺物一覧表

第5章 まとめ

発掘調査の結果、土坑17基、配石遺構1基、焼土遺構1基を検出し、縄文土器41点、石器類33点が出土した。この他に前年度の範囲確認調査の際に今回の発掘調査範囲から縄文土器4点、石器類4点が出土している。以下ではまとめとして遺構の帰属時期と、遺跡の性格の変遷を考えてみたい。

遺構内出土遺物から帰属時期が判明するのは、土坑a類のSK16土坑である。また、土坑c類のSK10土坑とSN17焼土遺構は帰属時期がある程度推定される。

SK16土坑はIV層から掘り込まれ、自然堆積の埋土中位からは後期後葉の台付鉢形土器の台部と思われる破片が出土した。SK16土坑の中程まで埋没した状態で後期後葉の土器が流入していることから、後期後葉もしくはそれをやや遡る時期の土坑と考えられる。上聖遺跡の周辺で、SK16土坑と同じ形状の、後期から晩期にかけての貯蔵穴と考えられる袋状土坑が検出された遺跡としては、鳶ヶ長根III遺跡、鳶ヶ長根IV遺跡、萩峰遺跡、山館上ノ山遺跡、(上ノ山遺跡第3次調査区、上ノ山I遺跡第1次調査区、上ノ山II遺跡第2次調査区)がある。⁽¹⁾これらの遺跡では、舌状台地の縁辺部に袋状土坑群が形成されており、上聖遺跡の場合もSK16土坑以外のa類の袋状土坑もSK16土坑と同じ頃に構築され、一連の土坑群を構成するものと推測される。

土坑c類のSK10土坑は底面にピットのある陥し穴と考えられるが、この種の陥し穴について田村壯一氏は、中振浮石層との関係に着目し、岩手県北部の事例を前期初頭以前としている。SK10土坑内から遺物は出土しなかったが、この土坑も前期初頭頃の遺構であろう。

SN17焼土遺構周辺の表土中からは、後期後葉と晩期中葉の土器の小破片が出土している。しかしIV層から掘り込まれたSK16土坑が後期後葉ごろと考えられることから、V層上面の焼土であるSN17焼土遺構はそれよりも古い時期のものとすることができる。また、中期中葉の大木8b式土器は1点のみが、SN17焼土遺構とは離れた調査区中央部の埋没谷に近いところから出土しており、SN17焼土遺構との関係は薄いものと考えられる。

SN17焼土遺構中からは5点の石器が出土した。そのうち石匙2点と不定形石器1点には「打面調整剥離技法」が認められた。この製作技法による石匙は、秦昭繁氏によれば「早期最終末の一型式から前期前葉の数型式の短期間に、北海道から東北地域の広範囲にわたって分布」するとされ、「松原型石匙」の名称が提唱されている。⁽²⁾米代川流域において「打面調整剥離技法」による石匙が出土している遺跡の例では、鳶ヶ長根IV遺跡で早期末の貝穀文土器とともに出土し、上野遺跡でも早期末から前期前葉の土器とともに「打面調整剥離技法」を用いた石匙、竪

状石器等が出土しており、秦氏の論考で明らかにされた傾向は大館北秋地域でも認められる。一方、調査区内出土土器の中で時期の判明するものは中期後葉のものが最も多いが、北の林II遺跡例はこの時期である。また、真壁地遺跡例では後期前葉の土器と併出し、萩崎遺跡例、丑森遺跡例、はりま館遺跡B区例、案内II遺跡例、腹輪の沢遺跡C地区例もこの時期の可能性がある⁴⁴⁾。このような類例も参考にすればSN17焼土遺構の帰属時期は、前期初頭、中期後葉、後期前葉のいずれかと考えられる。

以上から、遺構の帰属時期は、土坑c類のSK10土坑が早期末～前期初頭頃、SN17焼土遺構が前期初頭、中期後葉、後期前葉のいずれか、SK16土坑等a類の土坑6基が後期後葉と推定される。

次に遺構外遺物の出土状況と遺構について検討する。

SN17焼土遺構の周囲（半径2m以内）からは、焼土中から出土した石器と同様の「打面溝整削離技法」によって製作された縦型石匙が1点と、3点の微小剝離痕のある剝片が出土し、SN17焼土遺構と同時期のものである可能性がある。また、SK10土坑とSN17焼土遺構の間からは、これらの遺構の推定所属時期の範囲に入る前期初頭の土器片が3点出土している。両者または一方の遺構と関連する遺物とも考えられる。

時期の判明する土器の中では中期後葉のものが最も多い。中期後葉の遺物が出土する遺跡は集落跡の比率が高い傾向があり⁴⁵⁾、調査区外に中期後葉の住居跡が存在すると推測される。

袋状土坑群と関係ありそうな後期・晩期の土器は4点が土坑群の範囲内から出土した。土坑内のみならず袋状土坑群域としてみても遺物は少量である。この区域が、土器や石器をあまり使用しない場所であったことを窺わせる。

以上のような遺構や遺物のあり方から、かなり憶測を含むものではあるが上聖遺跡調査区の変遷は、

- ① 前期初頭頃には陥し穴（SK10土坑）による狩猟が行われた。
- ② 中期後葉にはこの台地にも集落が形成されるが、調査区は若干の遺物が散布する集落の周縁部であった。
- ③ ①、②の時期または後期前葉には、狩猟等によって得られた獲物を解体し切り取るために、石匙、不定形石器及び剝片の鋭い縁部が用いられた。そして、人間活動の拠点として屋外の地床炉（SN17焼土遺構）が使われた。
- ④ 後期になると、米代川右岸の舌状台地の各地に堅果等の植物性食料を貯蔵する貯蔵穴群が構築される。上聖遺跡も、遺跡の立地する河岸段丘から北方の山地にかけて採集される植物性食料が貯蔵される拠点の一つとなり、多数の貯蔵穴（SK16土坑など）がつくられ、使用された。

と推測される。

註

- (1) 第2章第2節歴史的環境を参照。
- (2) 田村壯一「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要VII』(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1987(昭和62年)
- (3) 秦 昭繁「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙—松原型石匙の分布と製作時期についてー」『考古學雑誌』第76巻第4号 日本考古學會 1991(平成3年)
- (4) 「打面調整剥離技法」によって製作された石匙について米代川流域の出土例を見ると、早期末から前期前葉(円筒下層a式より占い時期)に属する可能性のある出土例は7例(31点)であるのに対し、それより新しい時期に属すると考えられる出土例は16例(102点)である(第4表)。遺構外出土例には異なる時期の遺物が混入している可能性があることを考慮しても、早期末から前期前葉の土器が出土していない遺跡からの出土例が9例あり、必ずしも早期末から前期前葉の範囲内とは言えない。

はりま館遺跡B区の北西端平坦面、斜面遺構外出土例は、後期前葉または弥生後期に属するとしている。真壁地遺跡S I 03竪穴住居跡出土例では、埋土の全層から後期(十勝内I式)の土器が出土している。館下I遺跡は中期の集落跡で、円筒上層c・d式期と大木10式期の集落跡が地点を変えて営まれた遺跡であるが、米代川流域では最も多い85点が出土している。ここでは円筒上層c・d式土器と大木10式土器以外は出土していないとされている。

このような状況から、少なくとも米代川流域では「打面調整剥離技法」によって製作された縦型石匙の帰属時期を早期末から前期前葉までと限定することはできない。秦氏の論考は、広範囲の大きな流れを把握したもので、この技法を用いた石匙の出現と盛行する時期及び地域については秦氏によって概ね解明されたものと思われるが、その下限の時期については地域性をも考慮しながらさらに検討を重ねる必要があろう。

したがって、「打面調整剥離技法」による石匙からは、S N17焼土遺構の帰属時期は、出土した土器の時期(早期末から前期前葉、中期中葉、中期後葉、後期前葉、後期後葉、晚期中葉)のいずれにも該当する可能性があることになる。

- (5) 該期の遺跡が多数検出された雄物川下流域(御所野台地、七曲台)では、70~90%が集落遺跡である。

谷地 薫「七曲台における縄文時代の居住形態についてー居住形態の変遷に関する一試論ー」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第5号 秋田県埋蔵文化財センター 1990(平成2年)
安田忠市「秋田市御所野丘陵部遺跡群についてー縄文時代前・中期の住居跡ー」『よねしろ考古』第7号 よねしろ考古学研究会 1991(平成3年)

所在地	遺跡名	出土地点	時期	点数	文献
小坂町	大岱Ⅳ	遺構外	前期(円筒下層b・c・d式)、後期、弥生	2	①
小坂町	大岱Ⅰ	遺構外	前期(円筒下層a式より古い時期、前葉～後葉)、中期(円筒上層d式)中期末～後期初頭、後期前葉～後葉、晚期中葉～後葉、弥生	2	②
小坂町	丑森	遺構外	後期、弥生	1	①
小坂町	はりま館	A I・II・III区遺構外 B区北西端平坦面、斜面遺構外(MR78)	前期、後期、晚期 後期前葉または弥生後期	2 1	③
鹿角市	餅野	遺構外	前期初頭	1	④
鹿角市	案内Ⅱ	遺構外	前期、後期前葉(十腰内I式)、後期後葉～晚期	1	⑤
鹿角市	北の林Ⅱ	遺構外2-C区	中期末～後期初頭	1	⑥
鹿角市	歌内	遺構外	中期(円筒上層e式、大木8b・9式)、晚期(大洞A'式)	1	⑦
大館市	萩峰	II区遺構外	前期末(円筒下層d式)、後期前葉(十腰内I式)	1	⑧
大館市	鳩ヶ長根Ⅳ	遺構外Q区(M'区)	早期末(貝殻文土器)	1	⑧
大館市	上聖	S N17焼土遺構		2	
大館市	上聖	遺構外	前期初頭、中期(大木8b式)、中期末～後期初頭、後期前葉、後期後葉、晚期中葉	1	本書
大館市	家ノ後	遺構外	中期後葉、後期末、晚期前葉	3	秦著
大館市	山王岱	遺構外	前期、中期後葉、後期、晚期(大洞B C式)	1	著
大館市	上野	遺構外	早期末～前期初頭	17	著
阿仁町	上岱Ⅰ	遺構外	中期(円筒上層d式、大木8a式)	1	⑨
二ツ井町	毫毛沢	遺構外	前期初頭～前葉、前期末～中期初頭、中期末～後期初頭	5	⑩
能代市	館下Ⅰ	J H02堅穴住居跡 遺構外	中期(円筒上層c式) 中期(円筒上層c+d式、大木10式)	2 83	⑪
能代市	腹鞍の沢	A地区遺構外 C地区遺構外	(縄文) 中期(大木8a式)、後期前葉(十腰内I式)、後期後葉	1 1	⑫
能代市	真壁地	D調査区S I 03堅穴住居跡	後期前葉(十腰内I式)	1	⑬
能代市	寒川Ⅰ	遺構外	早期末～前期初頭、前期末～中期前葉、中期中葉～後葉、後期後葉、晚期末～弥生	4	⑭
能代市	福田遺跡の周辺	表面探集	前期(円筒下層a式)、後期前葉(十腰内I式)	1	⑮

第4表 米代川流域の「打面調整剝離技法」による石匙の出土地名表

第4表の文献

- ① 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X』秋田県文化財調査報告書第120集 1984 (昭和59年)
- ② 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X』秋田県文化財調査報告書第109集 1984 (昭和59年)
- ③ 秋田県教育委員会『はりま館遺跡発掘調査報告書（上巻・下巻）－東北自動車道小坂インターチェンジ建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第192集 1990 (平成2年)
- ④ 秋田県教育委員会『鹿角市・小坂町大規模農道発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第29集 1973 (昭和48年)
- ⑤ 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書V』秋田県文化財調査報告書第91集 1982 (昭和57年)
- ⑥ 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IV（本文編・図録編）』秋田県文化財調査報告書第90集 1982 (昭和57年)
- ⑦ 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書II』秋田県文化財調査報告書第88集 1982 (昭和57年)
- ⑧ 秋田県教育委員会『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第84集 1981 (昭和56年)
- ⑨ 秋田県教育委員会『上岱Ⅰ遺跡発掘調査報告書－国道105号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第184集 1989 (平成元年)
- ⑩ 秋田県教育委員会『竜毛沢遺跡発掘調査報告書－一般国道7号ニツ井バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第188集 1990 (平成2年)
- ⑪ 秋田県教育委員会『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第62集 1979 (昭和54年)
- ⑫ 秋田県教育委員会『腹敷の沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第97集 1982 (昭和57年)
- ⑬ 秋田県教育委員会『真壁地・蟻ノ台遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第102集 1983 (昭和58年)
- ⑭ 秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第167集 1988 (昭和63年)
- ⑮ 秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II－福田遺跡・石丁遺跡・獅子沢遺跡・十二林遺跡－』秋田県文化財調査報告書第178集 1989 (平成元年)
※ 1991 (平成3年度) 発掘調査。報告書は平成3年度刊行予定。
※ 1991 (平成3年度) 発掘調査。報告書は平成4年度刊行予定。

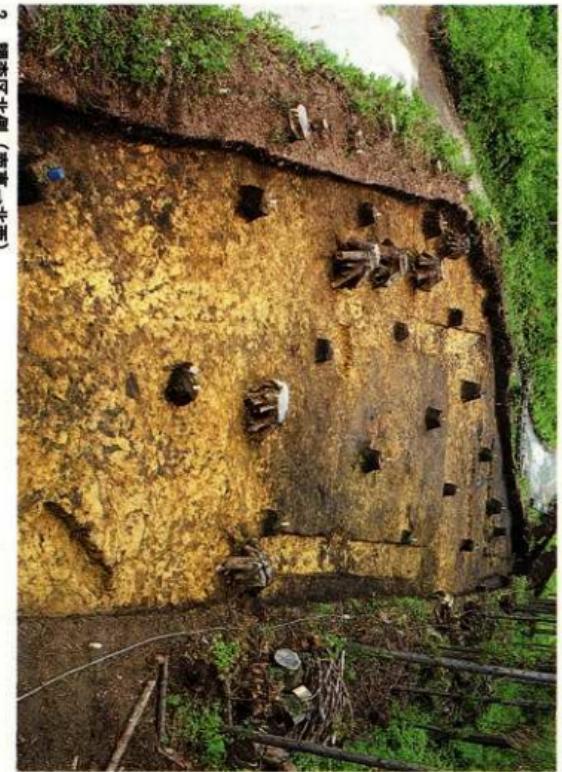
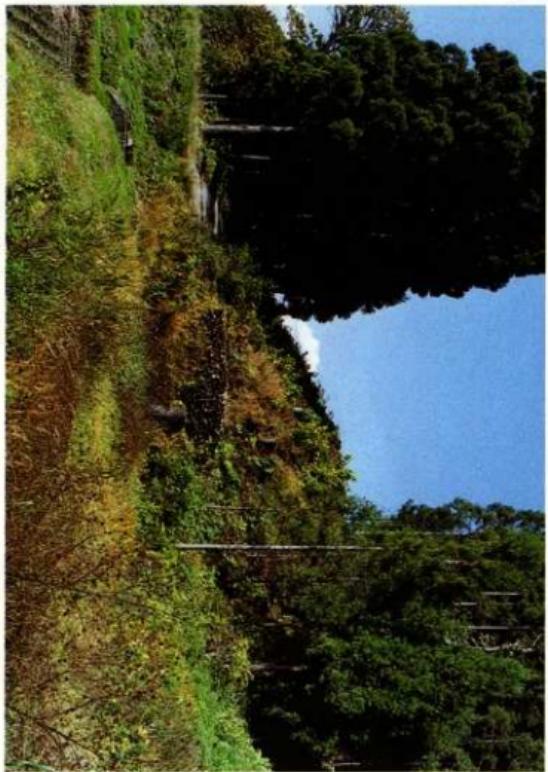


1 遺跡遠景 道日木スキー場から（南→北）



2 遺跡遠景 旧国道103号から（南西→北東）

図版
2





1 調査区東側（北西→南東）



2 調査区北側 調査前の状況（南東→北西）



3 調査区東側 調査前の状況（北西→南東）



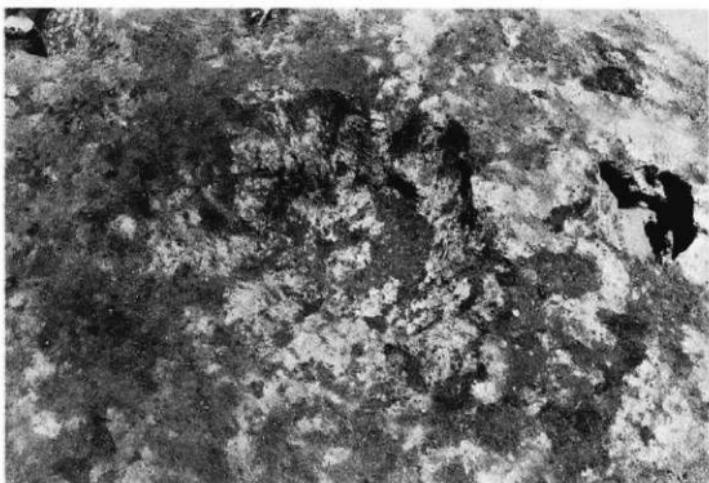
1 SK01土坑挖掘状况（北→南）



2 SK01土坑断面土层（南→北）



3 SK03土坑挖掘状况（東→西）



1 SK02土坑完掘状况（北→南）



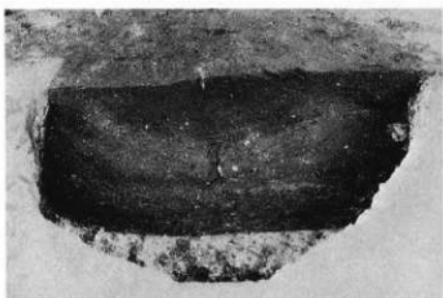
2 SK02土坑断面土层（南→北）



3 SK02土坑出土石器



1 SK05土坑完掘状况（北東→南西）



2 SK05土坑断面土层（南→北）



3 SK05土坑出土石器



1 SK06土坑
完掘状况
(北→南)



2 SK06土坑断面土层 (北→南)



3 SK06土坑出土石器



4 SK07土坑完掘状况 (北→南)



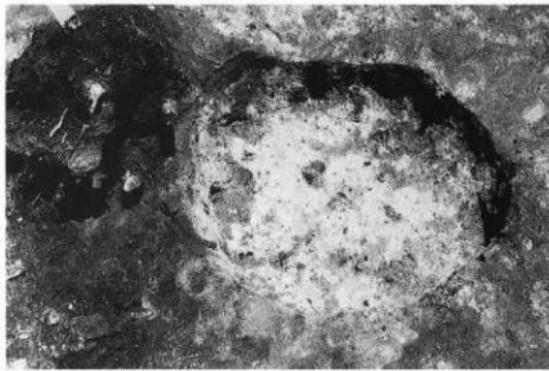
1 SK08土坑
断面土層
(南西→北東)



2 SK08土坑完掘状况 (北東→南西)



3 SK08土坑出土石器



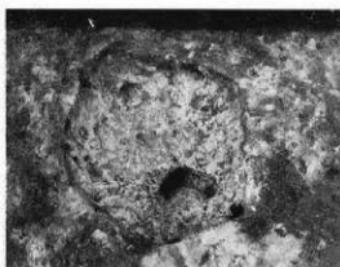
4 SK09土坑完掘状况 (西→東)



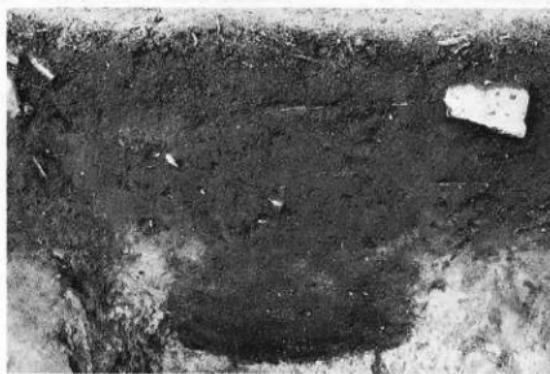
1 SK10土坑
完掘状况
(北西→南東)



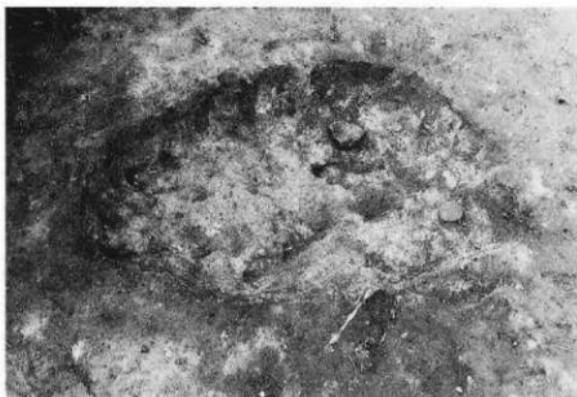
2 SK10土坑断面土層 (北東→南西)



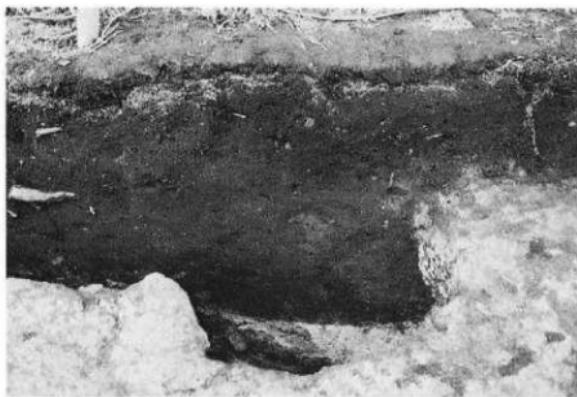
3 SK11土坑完掘状况 (南西→北東)



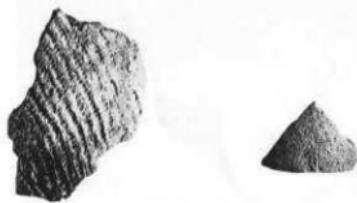
4 SK12土坑
断面土層
(南西→北東)



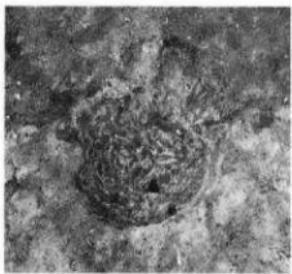
1 SK13土坑
完掘状况
(南→北)



2 SK16土坑
断面土層
(南西→北東)



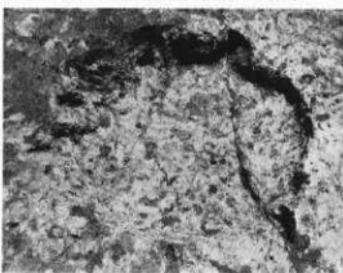
3 SK16土坑出土土器



1 SK18土坑完掘状况（南西→北東）



2 SK21土坑断面土層（西→東）



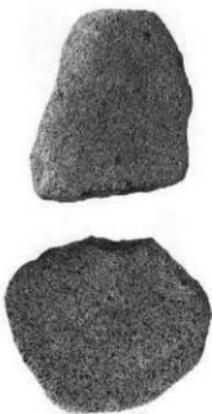
3 SK22土坑完掘状况（西→東）



4 SK23土坑断面土層（北東→南西）



5 SQ20配石造構換出狀況（西→東）



6 SQ20配石造構出土石器



1 S N17焼土造構検出状況（西→東）



2 S N17焼土造構断面土層（南→北）

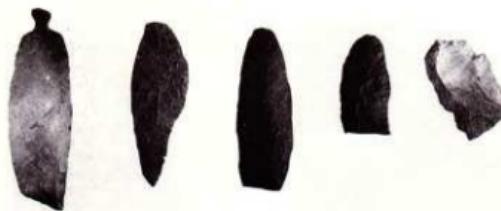


3 S N17焼土造構石器出土状況（北→南）



4 範囲確認調査時の検出状況（南→北）

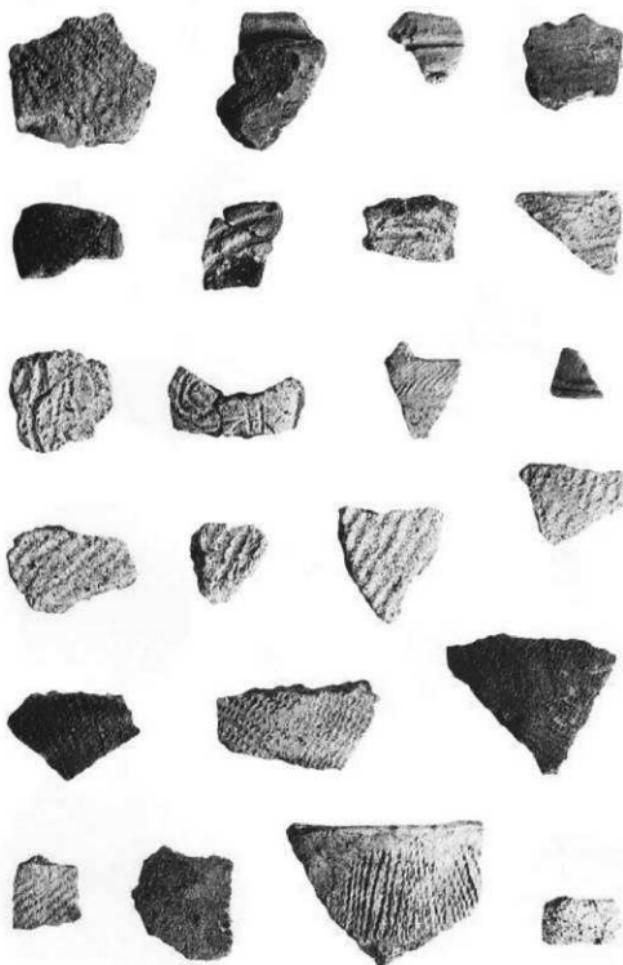
表



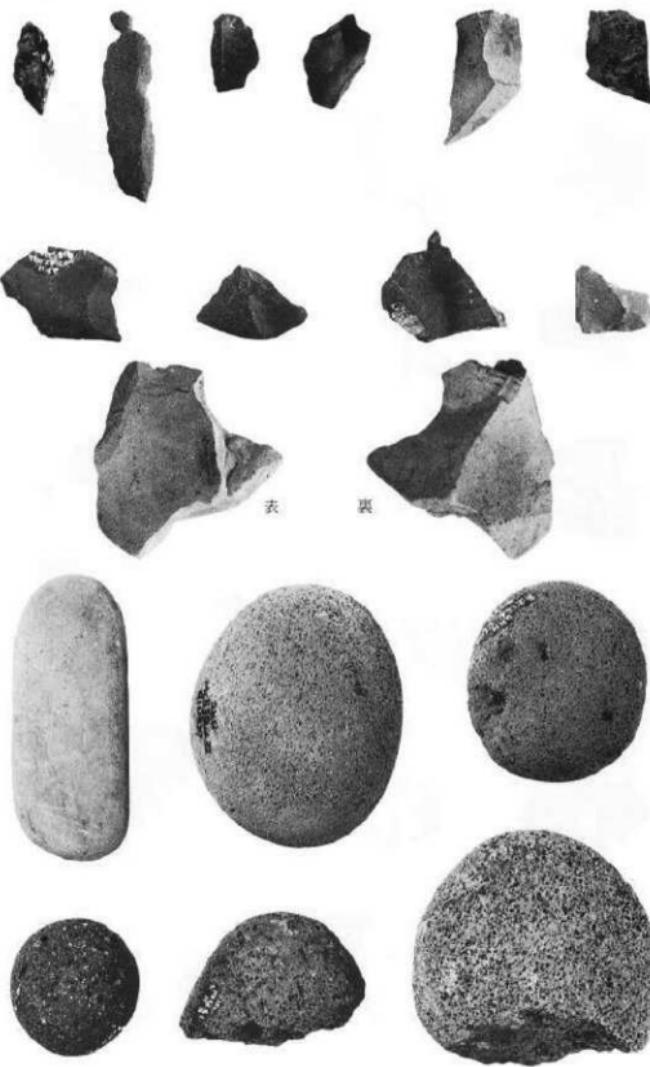
裏



5 S N17焼土造構出土石器



遺構外出土土器



遺跡外出土石器